



室蘭工業大学

学術資源アーカイブ

Muroran Institute of Technology Academic Resources Archive



ユートピア文学としてのTypee(1)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 室蘭工業大学 公開日: 2014-06-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 松田, 利定 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10258/3328

ユートピア文学としての *Typee* (I)

松田利定

Typee as Utopian Fiction (I)

Toshisada Matsuda

Abstract

Utopias are men's reactions on their environment, and utopian fiction needs certain target for attack. What Herman Melville picked up for his attack in *Typee* were the missionary endeavor in the Pacific, the white man's inhumanity to primitive man, and the Western civilization. He was anti-missionary, anti-colonialism and absolutely in favor of the savage of the Typee Valley. The sympathy for the oppressed and denunciation of the oppressors was one of Melville's central themes.

He instinctively took the side of the underdog, because he himself was a frustrated youth in the nineteenth-century American society. Before he fled to the South Pacific, he had already tried a number of jobs, experienced uncertainty and unemployment. His wandering years created in him a settled hatred of external authority or control, a lust for unrestricted freedom. *Typee* was an attempt to embody his longings for a really unbraced and ungirded freedom.

メルヴィル Herman Melville (1819-91) とユートピア文学との組み合わせは、多少の唐突の感を免れない。事実「ユートピア」という言葉をメルヴィル自身多用しているわけではない¹⁾。しかし、*Typee* (1846) 出版当時の書評の中には、そのユートピア的構造を指摘したものが少なくない²⁾、第三作 *Mardi* (1849) の書評にもユートピアへの言及が見られる³⁾。さらに「ユートピア文学としての *Typee*」というテーマは、浜田政二郎氏によって「ユートピア文学の二つのタイプ」⁴⁾ と題して、既にとりあげられていて、ことさらに新しい主題ではない。したがって、本稿では浜田氏とは多少違った視点から論じてみたい。

改めて述べるまでもなく、ユートピア文学は本来極めて政治性、思想性の

強い文学である。未来の理想社会に名を借りた激しい現実批判を行なおうとする精神構造は、ともすれば文学の畑からはみ出して、合理的計画至上主義に陥り、計画経済的思考に終始する危険性を絶えずはらんでいる。ユートピア文学を「牧歌的」と「科学的」とに分類⁵⁾しようと、「空間的」と「時間的」とに分けようとも、あるいは「かくあってほしい社会」Utopia と「かくあってほしくない社会」Anti-utopia, Dystopia とに区別しようとも、ある種の社会工学によって、社会的調和のとれたユートピアが実現するとする無邪気さが露骨であればあるほど、それを文学作品として読もうとする読者はいらだってくる。皮肉なことに、読むにたえるユートピア文学とは、まさにユートピア的構想のどこかに破綻のある場合であり、偽のユートピアを描いた場合である。この退屈しないユートピア小説という逆説がもし成立するとすれば、*Typee* がそれに該当するのではないか、という発想がこの稿のきっかけであるが、このことは *Typee* が広義のユートピア文学の系譜の中には入るとしても、厳密な意味でのユートピア文学ではないということにもなる。ともあれ、読んで面白いユートピア文学の秘密はどこにあるのであろうか。近年特にユートピア論議がジャーナリズムの日程にのぼる中で、仮に出版後120年以上も経た *Typee* に僅かばかりのメリットがあるとすれば、それは何なのか。こういった疑問から本稿は生まれた。

さて、ユートピストの多くは、渋沢竜彦氏も述べているように⁶⁾、プラトン Plato (427?-347? B.C.) 以来、貴族、あるいはブルジョアの出であって、保守的知識人あるいは芸術家の理性から生まれた夢、これがユートピストの真の姿であろう。没落ブルジョアの子メルヴィルが、その貧苦の中で、彼が属していた社会の構造や秩序に反抗し、その中から自分の夢や理想に反するものを抽出して、その夢を、欲望を、仮構の社会で満たそうとする時、彼はまぎれもないユートピストであった。周知のごとく、ユートピストを生む母は貧困であり、怒りであり、欲求不満であろうが、彼等の現実批判、現状脱出計画が、作品という形に結実するためには、海外発展の精神という産婆役が必要であった、と浜田氏は指摘している⁷⁾。しかし、これは楯の両面の関係

で、拡大の機運が海外に向けられる時代は、裏から見れば、同時にうっ積した不安な危機的状況の時代でもある。表面には顕われていない大きな危機感、不安感こそ逆にユートピア文学形成の必須条件であるとも言えよう。これらの点を考え合わせると、具体的な作品分析に入るまでに当然確認しておかななくてはならないいくつかの基礎作業があるように思われる。例えば、メルヴィルの内面の砂漠にくりひろげられるドラマに登場する逃亡者、追放された者、見棄てられた者のイメージを育てるに至った、無名時代の貧苦の生活を素通りできないだろうし、作者の思想性、政治性を抜きにしては、ユートピア文学は語れまい。それ故、便宜上主題の外に二本の補助線を引いて、**I**で伝記的事実を掘り起こして浮かび上がってくるメルヴィル像を扱い、**II**で作者の政治的関心、現実批判を具体的な改稿を例にとりて確かめた上で、**III**で本論に入ってゆくことにしたい。

I

伝記から浮かびあがってくるハーマン・メルヴィルの像は、社会からはみ出した人間である。そしてその伝記的事実はひとたび知ってしまうと、彼の作品、特に初期の作品を読むのに、とうてい無視できなくなるほどのものである。初期のメルヴィルの文学は「おのれ」を語ることから始まっている。「自我」の切り売りを唯一の拠りどころとする主観主義⁹⁾の作家であった。もし作家を闘士型作家と観察型作家に区分するならば、メルヴィルは前者である。けれども、勿論彼に「観察者」の要素がなかったとするものではない。処女作 *Typee* はまぎれもなくノンフィクション旅行記として出版されたものであり、又以後の作品にも記録文学的側面は否定し難い。しかし、メルヴィルはあくまで客観主義の文学を主張し、主観主義や主情主義の文学を排けた、例えばチェホフ Anton Chekhov (1860-1904) のような、乾いた目の観察者ではなかった。ともすれば、たかぶった言葉の中に、誇張や虚偽の入り込む、論争型、闘士型の作家であった。舌打ちしたり、つばを飛ばしたりするような激しい文章、筆走りのいい文章こそ彼のものであった。アマチュア

作家メルヴィルの誕生については、いつも引きあいに出されるが、順序としてホーソン Nathaniel Hawthorne (1804-64) に宛てた手紙を引用してみると――

My development has been all within a few years past. I am like one of those seeds taken out of the Egyptian Pyramids, which, after being three thousand years a seed and nothing but a seed, being planted in English soil, it developed itself, grew to greenness, and then fell to mould. So I. Until I was twenty-five, I had no development at all. From my twenty-fifth year I date my life⁹⁾.

私の成長はすべてこの数年間におこなわれたのです。私はたとえて言うならば、エジプトのピラミッドの中から採り出された種子のようなものです。この種子は三千年もの間、種子でした。種子にすぎなかったのです。それがイギリスの土地に蒔かれると成長をはじめ、みどりに生い茂り、そして朽ちて土に帰したのです。私も同じことです。二十五歳になるまで私は成長というものを知らなかったのです。二十五歳の時から私の生命がはじまったのです。

Typee 出版後五年を経て書かれた手紙であるが、二十五歳から自己発展が始まるとするこの作者自身の主観的証言の信頼性は、極めて高いように思われる。この内的告白を一つの前提として、大部分のメルヴィル論と同じ手順で、二十五歳までの無名時代のメルヴィルの記録をたどってみることにしたい。

1819年8月2日に「この小さな新入り者は、肺も丈夫ですし、よく眠り、気持よく乳を吸っていますが、実際大きくて丈夫そうな男の子です」the little Stranger has good lungs, sleeps well & feeds kindly, he is in truth a chopping Boy (*Log*, I, 3)¹⁰⁾ と父アラン Allan Melville (1782-1832) が伝えたハーマンは同月19日に the South Reformed Dutch Church で洗礼を受ける。この年は輸入取次商アランにとって不景気な年であった。翌1820年になってもなお景気は好転せず、21年にはアランの兄トーマス Thomas Melville, Jr. (1776-1845) が借入金の返済に窮して、刑務所入りする。1819

年から20年にかけては、ビーアド Charles A. Beard, Mary R. Beard も述べているように、合衆国では第一回の恐慌の時代であった。

The first terrific smash in the machine-production age occurred in 1819; another in 1829; the third and most severe in the history of the United States up to that date opened in 1837 and lasted for about five years¹¹⁾.

機械生産時代の最初のおそろしい恐慌は1819年におこり、次は1829年におこった。第三回の、しかもそれまでの合衆国史上で最もひどい恐慌は、1837年にはじまり、約五年間つづいた。

この稿の後ほどでふれることになるが、アランが決定的な倒産に追いこまれてオールバニー Albany にひきこもったのが1830年、ハーマンがリヴァプールに向かって出航したのが1839年、捕鯨船アクシュネット号 the *Acushnet* で南太平洋に向かったのが1841年であった。しかしこの間にも短い景気の好転期がなかったわけではない。1822年5月25日のアランの手紙には次のような記述がある。

..., thus far I have succeeded beyond my expectations, & find my credit as well established as I could wish; my prospects are good, & with the favour of Providence¹²⁾, & my usual prudence & industry, I have no fear of the result— (*Log*, I, 11)

現在までのところは、私の予想を越える成果をあげ得ましたし、私の信用状態も、望みうるだけ理想的状態であるように思います。将来の見透しもいいし、神の摂理と、日頃の慎重さと勤勉さをもってすれば、私は結果に対してまったく不安を抱いていません。

景気の晴れ間をついてアランはその経営を拡大してゆく。1820年9月には55 Courtlandt Street? に転居し、1824年には33 Bleeker Street に住居を移し、No 162 Pearl St. にオフィスを持ち、28年にはNO 675, Broadway に移っている。ハーマンの成長ぶりも「前者ハーマンは毎日規則正しく学校に通っていますが、健康を損ねるほど書物が好きなようには見えません」The former [Herman] attends school regularly but does not appear so fond

of his Book as to injure his health— (*Log*, I, 20) と母マライヤ Maria Melville (1791-1872) が伝えるように、順調なものであったが、1826年8月10日のアランの手紙には、

—he [Herman] is very backward in speech & somewhat slow in comprehension, but you will find him as far as he understands men & things both solid & profound, & of a docile & amiable disposition— (*Log*, I, 25)

この子は非常に物言いがまずく、どうも理解力が鈍いように思われます。しかし、この子が人間と物事を理解する力について言えば、しっかりしていて奥深く、またその性質は従順で、可愛いところがあることを発見なされるでしょう。

とある。話し方がまずい、と見た父親の観察は、翌年ハーマン九歳の時に変更を余儀なくされる。

You will be as much surprised as myself to know, that Herman proved the best Speaker in the introductory Department,— (*Log*, I, 32)

ハーマンがハイスクールの入門過程で、一番の演説者になったことをお知りになったら、あなたは私と同じようにびっくりなさることでしょう。

ハーマンの弁論に対する興味は、やがて十年後にオールバニーで Philologos Society と称する “improvement in composition, elocution and debate” を目標として結成されたクラブの会長として開花することになる。

さて、アランの経営の方だが、1830年の春には未返済の借入金がいよいよ十萬ドルを越え、同年十月にはニューヨークのオフィスをたたんで、オールバニーに移り、毛皮店を開くが、ここでもピーター・ギャンスヴォート Peter Gansevoort (1789-1876) から借りた資金を借入金の返済にあてるという典型的な自転車操業であった。やがて1829年から始まった第二回の恐慌にまきこまれて、32年1月、ハーマン十三歳の時にアランは「非常な精神的昂奮のもとで、時おり狂暴に、気が狂ったとも思われる状態で」 under great

mental excitement—at times fierce, even *maniacal* (*Log*, I, 51) この世を去る。三月には兄ギャンスヴォートとハーマンは Albany Academy を退校し、兄は毛皮、帽子の商をはじめ、ハーマンは New York State Bank に勤める。しかし、この銀行も 34 年夏には辞して、ピッツフィールド Pittsfield の伯父トーマスの農場で働くが、翌年春には、兄の店の手伝いをしながら Albany Classical School に通う。1836 年、ハーマン十七歳の三月には、兄の毛皮店も “Twenty Hat Trimmers—Wanted Immediately” と新聞広告を出すほどになるが、同年秋には、もうすでに経営が苦しくなり、マライアの持っていた土地を抵当に入れながら、辛うじて持ちこたえる。この年の 6 月 17 日には 1000 ドルで、12 月 31 日にも 1000 ドルでマライアは土地を手離すが、この間にも 37 年の最大の恐慌は着々としのびよってくる。時間の問題と思われていた兄の倒産は意外に早く、四月におとずれる。六月には三男アラン Allan Melville (1823-72) もアカデミーを退校して、法律事務所勤めをはじめ、伯父トーマスも負債にたえかねてイリノイのガレナ Galena に移る。再び失職したハーマンは、この年の秋にピッツフィールド近くの小学校の教師になるが、これも一学期しか続いていない。短い期間ではあったが、この年の暮にピーター・ギャンスヴォートに宛てた手紙には気になる言葉がある。

But now, having become somewhat acquainted with the routine of business, …, a few intervals of time are afforded me, which I improve by occasional writing & reading … (*Log*, I, 72)

しかし、最近幾分毎日の仕事にも慣れてきたし、……、少しばかりの時間の余裕もできたので、それを利用して、時折物を書いたり、読書をしたりしております。

この数行には、ささやかながら物を書こうとする兆が見えるが、不況のどん底時代に、失業青年が考え出した回答は、もっと現実的なものであった。彼は Erie Canal でエンジニアとして働くべく、1838 年 11 月には Lansingburgh Academy の “surveying & engineering” のコースに入るが、熱心

な求職運動にもかかわらず、ついに職を得ることが出来ず、土木技師メルヴィルは実現しないままに終る。

しかし、1838年は、メルヴィルの書いたものがはじめて活字になった年でもあった。The Albany Microscope という新聞紙上で、一月?から四月までに掲載された一連の投書がそれである¹³⁾。メルヴィルが入会していた Young Men's Association の付属機関であった Philologos Society なる弁論部の会長にメルヴィルが選ばれた時から、この泥仕合は始まる。前会長ヴァン・ルーン Charles Van Loon が、「Melvillian なる男が、二人しか出席していない委員会で勝手に会長になった」と火ぶたを切れば、メルヴィルも「会の再建のために、何度もミーティングを持ったが人が集まらない。仕方なく自分がまとめ役を買って出た」とやり返す。が結局2月9日にメルヴィルが正式に会長に選ばれる。新会長メルヴィルが「Stanwix Hall に会のために優雅な一部屋を、私の政治力で獲得した」とやれば、前会長は「合法的に召集された総会でない場で行なわれた選挙は、無効だ」と折れない。さらに2月17日にはヴァン・ルーンが「会が獲得したと言っている部屋は、会とは無関係である。選挙にいたっては、まったくの茶番劇だ」と書けば、「どんな社会にも、狭量で嫉妬深い奴はいるものだ」とメルヴィルも応じる。彼が Van Loon をもじって “In the *van* of these notable worthies stands pre-eminent, that silly and brainless *loon* who…” と皮肉れば、ヴァン・ルーンも “the more romantic appellation of Hermanus Melvillian” (Log, I, 75-76) を進呈しようと負けない。この泥仕合は四月に入って、“Americus” と称する一会員の仲裁によって、ようやく終結に向かう。たわいない弁論部の主導権争い、と言ってしまえばそれまでである。そこには勢にまかせた飾りの多い文章は見られても、内容に乏しいことは確かである。しかし、自分の書いたものが次々と活字になってゆき、それが多くの読者の目にふれる。このぞくぞくする楽しみをメルヴィルが味わったであろう点は、どうでもいいことではない。読者の存在を意識しながら、新聞紙上で派手な論争をたたかわす——好むと好まざるとにかかわらず、戦闘的姿勢になり、功撃的にな

る。この論争には文学的意図がまったくないだけに、却って意外にメルヴィルの気質の一端が顕われているとも言えよう。

やがてこの経験で自信を得てか、1839年5月4日と18日に“L. A. V.”という匿名で応募した“Fragments from a Writing Desk”¹⁴⁾と題する短篇が、*The Democratic Press and Lansingburgh Advertiser*なる新聞に掲載されることになる。これはハワード Leon Howard が言っているように¹⁵⁾、*Erie Canal*の技師のポストを獲得するべく就職運動を終えて、結果を待っていた間に書かれたものであろうし、この種の習作¹⁶⁾がここでプツリ切れるのは、いよいよさし迫った一家の経済的破局が理由であろう。何が何でも職にありつこうとするハーマンを、マライアは「ハーマンは、何か仕事はないものかとここ数日、歩きまわっています」*Herman has gone out for a few days on foot to see what he can find to do—*と伝え、兄は「職さがしに出ていたハーマンが、手ぶらで帰ってきた」*Herman has returned from his expedition, without success—*(*Log*, I, 85)と記す。幾日も幾日も、朝早く職を求めて家を出て、空しく空手で帰宅するハーマンに兄ギャンスヴォートはリヴァープール行の商船セント・ロウレンス号 *the St. Lawrence* の乗船契約を結んでやる。ハーマンを送る母の手紙に「すべてこの世のものは、何て不確かで移ろいやすいのでしょうか」*How uncertain & changing are all things here below—*(*Log*, I, 86)とある「流転」¹⁷⁾の認識は、ハーマンのものであつたらう。没落商人の子は、どのような主義も思想も、ともに流転変貌することを身をもって知っていたであらう。この流転の意識は、ゆれ方によってはベシミスティックな絶望の認識ともなり、また失うものを何も持たない、晴々としたオブティミスティックな期待にもなる。十九歳のハーマンが感じたであらう失意、絶望に関しては、使い古された引用ではあっても、第四作 *Redburn* (1849) からの引き写し以上の説明はできそうにもない。

Sad disappointments in several plans which I had sketched for my future life, the necessity of doing something for myself, united to a naturally roving disposition, had now conspired within me, to

send me to sea as a sailor¹⁸).

未来に描いていたさまざまな計画の悲しい失望、自分で何かしなければならぬという気持、それが生まれつきの放浪性と結びついて、この私を一介の水夫として海に出させたのだ。

I had learned to think much and bitterly before my time; all my young mounting dreams of glory had left me; and at that early age I was as unambitious as a man of sixty¹⁹).

私はまだその年でもないのに、多くのことを考え、苦々しい思いをいなくようになった。天かける華やかな少年の夢は、ことごとく私から離れ去った。その若さで、私はまるで六十歳の老人のように野望を完全に失っていた。

Talk not of the bitterness of middle-age and after-life; a boy can feel all that, and much more, when upon his young soul the mildew has fallen; and the fruit, which with others is only blasted after ripeness, with him is nipped in the first blossom and bud. And never again can such blights be made good; they strike in too deep, and leave such a scar that the air of Paradise might not erase it²⁰).

中年や晩年の苦しみを言々するのは、やめてもらいたい。そんなものを少年は残らず感ずることが出来る。いや、もっと苦しい思いをすることができるのだ。幼い魂の上に病原菌がついた時には、他の人にとっては、果実は熟してからしなびるのに、少年にとっては、つぼみが結んだか結ばぬうちに、花が開いたか開かぬうちに、摘み取られてしまうのだ。そしてこのような病菌の害は、とりかえしのつかないものだ。深く食い入って大きな傷を残し、たとえ楽園の風といえども、これを消し去ることは出来ないだろう。

上の文章は多少の扮飾は当然あるにしても、当時のハーマンの心の風景描写としては精度の高いもののように感ぜられる。1839年6月5日から、同年10月1日までの最初の航海の記録は、僅かばかりしか残存していない。精緻を極めたあの *The Melville Log* でさえも、この間は *Redburn* からの引用のつぎはぎ細工である。したがって不本意ながら1849年の作 *Redburn* によら

ざるを得ない。失望の書、幻滅の書、*Redburn* からの引用は、執筆当時の作者の暗澹たる気持を割りきしても、なおかつ暗いものになってしまう。

まず、アメリカへの幻滅が捕鯨船あがりの船員ラリー Larry の口を借りて出る。

‘And what’s the use of bein’ *snivelised*?… Blast Ameriky, I say. …I tell ye, ye wouldn’t have been to sea here, leadin’ this dog’s life, if you hadn’t been snivelised—… Snivelisation has been the ruin on ye; and it’s spiled me complete; I might have been a great man in Madagasky; it’s too darned bad! Blast Ameriky, I say.’²¹⁾

「文明人になってどうなるんだい。……アメリカなんてくそくらえだ。お前だって、その文明ってやつがなけりゃ、こんな海にきて犬っころみたいな真似もしないだろう。文明ってやつは、お前を台無しにしたんだぜ。おれもおかげで、めっちゃくちゃだ。マダガスカルにでも生まれてりゃあ、大したものになれたんだ。しゃくにさわらあ。アメリカの畜生めってんだ。」

ハーマンの幻滅は、ただ単に「社会の目的も、政府の存在理由も、ともに生命、自由、平等、幸福の追求、および一般の繁栄にあると宣言されている国家」²²⁾ アメリカ合衆国に対する幻滅にとどまらない。ニューファウンドランドの霧の中に浮かびあがった鯨にも失望し、

Can these be whales? Monstrous whales, such as I had heard of? I thought they would look like mountains on the sea; hills and valleys of flesh! regular krakens, that made it high tide, and inundated continents, when they descended to feed! It was a bitter disappointment, from which I was long in recovering. I lost all respect for whales;…²³⁾

これが鯨か。聞き伝えられていたあの巨大な鯨とは、このことだったのか。海上の山、肉の丘と渓谷、まさしく大怪物のごときもの。高潮をわきたてて、餌を求めて沈む時は大陸をも水浸しにするようなものを、想像していたのに。これは苦々しい幻滅だった。恢復するには長く時間がかかった。私は鯨に対するあらゆる畏敬の心を失った。

アイルランドの山並にも落胆する。一カ月の航海のあげくやっと目にした山々は、故郷の山と何の変わったところもない。リヴァープールに着いてからは、又しても幻滅に次ぐ幻滅である。煤煙におおわれたこの都市に、主人公は人間悪と社会悪の極みを見る。波止場に群がる夥しい乞食、貧民の群れ、殺人、強盗、かっぱらい、アル中患者たちの、すさまじい社会悪を、貧困が生み出す犯罪の数々を目撃する。教会すら浮浪者たちの死体置場になってしまっている西欧の最も暗黒にして悲惨な姿を経験する。

Ah! what are our creeds, and how do we hope to be saved?…
Surrounded as we are by the wants and woes of our fellow-men,
and yet given to follow our own pleasures, regardless of their pains,
are we not like people sitting up with a corpse, and making merry
in the house of the dead?²⁴⁾

ああ、われわれの信条はいったいどうしたのだ。このままでは何として救いを期待することができよう。……われわれの周囲では、同じ人間である同胞が貧しさと悲しみに悩んでいる。その苦しみをかえりみもせず、みな思い思いに快楽を追い求めるとは、われわれはあたかも死体の通夜をしながら、死者の家で浮かれさわぐのに似ていないか。

大恐慌下の合衆国からはみ出したハーマンが、1839年のリヴァープールで見た現実には「恢復するには長い時間のかかる」完全な幻滅であった。「六十歳の老人のように希望を失って」出航したハーマンは、さらに大きな絶望を抱いて帰ってくる。

十月に船を下りたハーマンはその月(?)には、既に再度ランシングバーグ近くの Greenbush Academy で教壇に立っているが、その間にもメルヴィル一家の家計は日増に窮迫してゆく。マライアが当にしていた僅かばかりのハーマンの収入も資金難のために不払に終わってしまう²⁵⁾。1840年5月22日?に解雇されたハーマンは、同月末には Brunswick public school の代用教員になるが、ここもあきらめて早くも6月4日には、イリノイのガレナにいる伯父の農場に出かける。しかし、ここでハーマンを待っていたのも、やはり「幻滅」²⁶⁾であった。かつては第一線の外交官であり、銀行家であった

トーマスの零落した敗残の姿に耐えられず、九月には再び母のもとに帰ってくるが、間もなく兄をたよって職を求めてニューヨークに出てくる。11月26日の兄の手紙には「ハーマンはまだ僕の所にいる。彼はこれまでもそうだったが、今でも僕にとっては大きな心配のたねだ。彼はまだ何の仕事も得ていない」Herman is still here —He has been & is a source of great anxiety to me—He has not obt^d a situation—(Log, I, 110) とあるが、12月18日付の家族にあてた手紙には、「この金曜日には、ハーマンの行先も決まることでしょう」on Friday Hermans destination would be decided とある。それを裏付けるかのように12月31日の捕鯨船アクシュネット号の乗組員名簿にはハーマンのサインがある。翌1841年1月3日ハーマン二十一歳の時、アクシュネット号は南太平洋に向けて出航するが、二度目のこの航海を作者は後日 *Moby-Dick* の冒頭で、

…having little or no money in my purse, and nothing particular to interest me on shore, I thought I would sail a little and see the watery part of the world. It is a way I have of driving off the spleen, and regulating the circulation²⁷⁾.

私の財布はほとんど空になり、陸上には何一つ興味をひくものはなかったもので、私はしばらく船を乗りまわして、世界の海原を知ろうと思った。憂うつを払いのけ、血行を整えるには、私はこの方法をとる。

とさりりと書く。前出の *Redburn* 冒頭の引用に比べると、ここにはおどける自分をじっと見つめる別のおのれがある。とはいえ、「空の財布」と「西欧社会への絶望、幻滅」が出航理由にあげられている点では変わりはない。

このハーマンの絶望、幻滅は、やがて次第に憎悪へと変貌してゆくが、ここで1844年10月14日にボストンに帰港するまでの四年近くの航海を整理してみると、次のようになる²⁸⁾。

- (1) 1841年1月3日、捕鯨船アクシュネット号でニュー・ベッドフォード New Bedford を出航し、翌年7月9日にマーケサス諸島 the Marquesas Islands の Nukuheva で *Typee Valley* に逃走するまでの航海。

- (2) 1842年8月9日, *Typee Valley* より脱出して, 捕鯨船 *the Lucy Ann* 号に乗船し, 9月20日にタヒチ島の Papeete で下船するまでの航海。
- (3) 1842年11月3日(4日?), 捕鯨船 *the Charles and Henry* 号に乗り, 43年4月27日に Maui 島 Lahaina 港で解雇されるまでの航海。
- (4) 1843年8月17日, ホノルル Honolulu で合衆国海軍の軍艦 *the United States* の乗員となり, 翌44年10月14日に Boston で任を解かれるまでの航海。

(1)に続く三週間と五日間は *Typee* に詳しく, (2)の後約一カ月半は *Omoa* を生み, (4)は *White Jacket* (1849)に結実する。(3)の航海の後のホノルルでの三カ月あまりが, 気になる空白状態のまま残るが, 1843年6月1日の記録は, ホノルルでもハーマンの例の求職活動が続いていたことを物語っている。モントゴメリー Issac Montgomery という英国人のもとで “to keep the Books and Accounts” のための事務員として契約したのがそれである。年俸150ドルの約束で7月1日には, その四分の一のサラリーを受け取っている²⁹⁾。しかし, 何もモントゴメリーとの契約のみを特別視するにはあたらない。上記四回の航海はそれに先だつりヴァーポール行きの航海も含めて, すべてハーマンの求職運動の結果であった³⁰⁾。海上の職場を転々としたにすぎなかった。職さがしの必要がなかったのは *Typee* の舞台となる未開人タイピー族と暮らした約一カ月だけであって, 南太平洋の航海を終えてボストンに帰った時も, 無職ハーマンは四年前と同じであった。ひとまずランシングバーグの母のもとに居を構えて, 土産話に周囲を煙にまいていたであろううちょうどその頃, ピッツフィールドの友人スミス Joseph Edward Adams Smith の *Biographical Sketch* に次のような記述がある。

He [Herman] was now 25 years old and, with little disposition to return to the sea, was considering what pursuit in life he should choose...One could not well see to what profession he was adapted. A chance word decided it. The family had given their interesting wanderer a warm welcome home, and one day one of them, or one of their intimate friends said to him: “Why don't you put in book

form that story of your South Sea adventures which we all enjoy so much?" He at once accepted the suggestion... (*Log*, I, 188)

彼は二十五歳になっていたが、再度海に帰る気持はなく、どんな職業についたものかと考えつづけていた。彼がどんな職業に適しているのか、誰にもよく分らなかったが、たまたま飛び出した言葉が、それを決定してしまった。ハーマンの家族の人たちは、この珍しい体験をした放浪者を暖かく家に迎えていたが、ある日彼等の一人だったか、親友の一人だったかが、「われわれが聴いてこんなに面白い君の南海の冒険物語を、ひとつ書物にしてみたらどうだろう」と彼に言った。そして、彼は直ちにその提案をうけ入れた。

ハーマンの意志決定、作家志望は何に由来するか、という問にはおそらく完全な答を用意することはできないだろう。作家の意志決定や思想形式の原因や場所をせまく限定することほど危険なことはない。しかし次のように問うことは出来よう。彼の意志決定の主要な具体的要因は何か、と。これは明らかである。生計をたてること、金である。スミスが記録に残したハーマンの姿は、おそらく十一月頃のものであろうが、この年の冬には既に *Typee* に取りかかり、翌1845年春には完成させる。一度 Harper & Bros. で出版を断られるが、1846年6月2日に上梓される運びになる。ここに長かったハーマンの職さがしが、売文を業とする作家というかたちで終りを告げる。職業作家として売文だけで生計をたてようとするには、アメリカの読書界はあまりに未成熟ではあったが、作家ハーマン・メルヴィルの誕生をもって、彼の行動の時代は終る³¹⁾。

しかしハーマンの求職の努力が、社会への帰属の試が、「金」という目標を設定して、作家という回答を出したとしても、これによって彼の内的ヴィジョンの侵蝕が終ったとは考えられない。ここでどうしても引用しておきたいのは、後作 *Pierre* (1852) の中で、主人公ピエールに語らせている数行である。通一遍の描写を越えた激しい感情移入を行ないながらメルヴィルは書いている。

...at last the idea obtruded, that the wiser and the profounder he

should grow, the more and more he lessened the chances for bread; that could he now hurl his deep book out of the window, and fall to on some shallow nothing of a novel, composable in a month at the longest, then could he reasonably hope for both appreciation and cash. …he could not now be entertainingly and profitably shallow in some pellucid and merry romance³²).

彼の心の中に、自分が賢くなればなるほど、又深遠な考えを持てばもつほど、パンを得る道が狭くなるということ、もしも今この深い書物を窓から投げ出し、せいぜい一ヶ月で書きあげられる浅薄なつまらぬものを始めることができれば、自分は読者と金銭の両方を望むことが出来るという考えが浮かんだ。……けれども彼には、もはや澄明で楽しいロマンスで他人を楽しませ、自分を利するような、底の浅いものを書くことはできなかつたろう。

Typee, Omoo, Redburn, White Jacket という「パンを得るために」書いた一連の作品によってメルヴィルは、アランの記録によれば1846年から51年までに計8,069.36ドル、年間平均約1,600ドルの収入をあげているが³³、それらの作品に対する作者自身の評価は1849年には、

They [*Redburn, White Jacket*] are two *jobs*, which I have done for money—being forced to it, as other men are to sawing wood. …So far as I am individually concerned, & independent of my pocket, it is my earnest desire to write those sort of books which are said to “fail.”³⁴)

『レッドバーン』『ホワイト・ジャケット』、そんなものは二つとも金とり仕事です。私は金のためにそれを書いたのです。——木を挽いて金を儲けなければならぬ人がいるように、私もそれをしなければならぬのです。……私自身に関しては、家庭の経済ということ抜きにしては、いわゆる“金にならない”ような本を書きたいというのが、私の切なる願いなのです。

とあり、二年後には、

What I feel most moved to write, that is banned, —it will not pay. Yet, altogether, write the *other* way I cannot. So the product

is a final hash, and all my books are botches³⁵).

私が最も書きたいと心動かされるもの、それを書くことは禁じられております。それは金にならぬからです。しかし、まったく別のやり方で書くということは、私にはできない。したがって、出来上った作品は結局のところ、ごっちゃまぜで、私の本は全部つぎはぎ細工です。

と自己批判とも自己破壊ともつかない告白になる。しかし、これらはいずれも後日の話で、処女作時代のメルヴィルは、大衆文学の作者として、流行作家の人気に酔った「人喰い人種と暮らした男」であった³⁶。

II

メルヴィルの第一作 *Typee* はその初版が1846年2月にロンドンのジョン・マレー社 John Murray と、ニューヨークのウィリー・アンド・プトナム社 Wiley and Putnam から同時出版されたが、同年7月15日付のマレー宛の手紙の中でメルヴィルは、初版に手を加えた「改訂版」を出すつもりである、と述べた後でその理由を指して、次のように記している。

The revision will only extend to the exclusion of those parts not naturally connected with the narrative, and some slight purifications of style. I am persuaded [*sic*] that the interest of the book almost wholly consists in the *intrinsic merit of the narrative alone*—& that other portions, however interesting they may be in themselves, only serve to impede the story. The book is certainly calculated for popular reading,.... —Proceeding on this principle then, I have rejected every thing, in revising the book, which refers to the missionaries. Such passages are altogether foreign to the adventure, & altho' they may possess a temporary interest *now*, to some, yet so far as the wide & permanent popularity of the work is concerned [*sic*], their exclusion will certainly be beneficial, for to that end, the less the book has to carry along with it the better³⁷).

改訂は、物語の筋には自然に結びつかない箇所を削除することと、文体を僅かばかり整えること、この二つの範囲にだけ止めることになりそうです。この本の興味は、ほとんど完全に物語の筋が持っている固有の

価値だけにあるということ、そして、他の箇所はそれ自体いかに面白くとも、この物語を損ねることにしかならないということ、信じております。この書物は、確かに大衆読物として計算されたものであります。[中略] この考え方を推し進めた結果、私はこの本を改訂するにあたって、宣教師たちにふれた箇所は全部削りました。このような箇所は、ある人たちにとっては、現在のところ一時的には興味があるにしても、冒険物語にはまったくなじまないものであり、この本の広範囲にわたる恒久的人気という点に関して言えば、こういった箇所の削除は、確かに有益であり、大衆的人気をかちとるという目的のためには、このような箇所が少なければ少ないほど、良いように思われます。

改訂版で削除の対象とした箇所は、冒険物語に直接関係のない部分、特に伝道活動に言及した箇所であり、筋の展開上不要と思われる箇所を切り取ったこの外科的手術は、広範囲にわたる永久的な人気という点からすれば、大いに効果があるように思われる、文体も幾分整えることが出来た、と述べているこの手紙の真意は那邊にあったのだろうか。ただ単に作品としての統一がねらいであったのか、彼の心の変化を告白したものか、売れなくては困る作品のための援護射撃のポーズなのか、あるいは社会の、共同体の「内側」に入りこむための妨げとなる自己の信条の駆逐が目的であったのか、さまざまに解釈出来そうである。しかし多少の疑問は残るものの、改訂版が合衆国で出版される以前、つまり改めてメルヴィルがその決定を伝えるまでもなくそれ以前に、既に初版から削除した版をプトナム社が出版していたという事実³⁸⁾を考えに入れると、この手紙は、どうやら事後承認を求められたメルヴィルが、アマチュア故の自信のなさから、そうしておけば安全無事だと判断して、妥協し、その結果流行作家の椅子に坐りたい気持だけが表面に顕われた手紙、と見ることも可能なように思われる³⁹⁾。しかし、多分に外的強制が働いたとはいえ、ここであまりに保身、処世を強調することは、早急のように思われる。と言うのも、批判、攻撃の対象となりそうな箇所を、ことごとく削除し去った改訂アメリカ版を出した直後の第二作 *Omoo* 脱稿の頃、1846年12月10日に、信頼を寄せていたダイキンク Evert A. Duyckinck (1816-

78) に宛てた手紙に、又次のような気になることが書かれているからである。

Those marked in the Table of Contents as Nos V. VII. & XVII. have been rejected altogether—but this does not break the continuity of the book. I have not as yet altered the numbers of the chapters as thus affected. I beg you to pay particular attention to the following chapters—Chapters 33·34—& 45·46·47·48·49·50.—They all refer more or less to the missions & the condition of the natives⁴⁰.

目次の中で第五、七および十七章と表示されていた章は、完全に削除しました。しかしこれによって、この物語の続きぐあい崩れる訳ではありません。この削除によって影響を受けた章の数を、まだ変更しておりませんが、次の数章、即ち第三十三と三十四章、および四十五から五十章まで（とりわけ第三十三、四十九、五十の各章）を特に留意して下さるようお願いします。それらの数章はすべて、多かれ少なかれ、伝道活動と原住民の現状にふれたものであります。

引用の前半は、*Typee* 同様に削除した章があることを述べており、後半は、ダイキックに南海での伝道活動と現地人の現状に触れた計八章の文学的価値と、妥当性を評価してほしいという依頼であるが、ここで、前作で削除した箇所と同傾向のものを、第二作でも気にはしながらも書かずにはすませ得なかったという事実を前にしては、保身、読者に対するおそれを強調するのは、見当違いのように思われる。むしろ止むなく改訂アメリカ版で削除してしまった箇所に、作者が意外に愛着を感じていたと思われる節がある。最初の手紙を読んでも、削除箇所にふれて、その部分が「それ自体いかに面白くとも」however interesting they may be in themselves とか、それらの箇所は「ある人たちにとっては、現在のところは一時的な興味はあるにしても」altho' they may possess a temporary interest now, to some, とか述べているように、その価値を遠まわしに認めている。この「他の部分」other portions と呼ばれている作者の生の声が聞こえてくる箇所、主観が露出している数章が、次作 *Omoo* にそのままの形で復活しているということは明らかで

ある。これらの筋の展開上必ずしも必要としない数章に、メルヴィルが非常に気をもんでいたという事実は、この際重要である。

もっとも、テキストの裏付けなしに「主観の露出」といった先走ったことを書いたが、メルヴィル自身はむしろこれとは逆のことを言っていて、マレー社の Home and Colonial Library というノンフィクション・シリーズの中に入れて出版されて以来、作者の言葉はことごとく事実性、記録性、客観性の強調であり、フィクションの、主観の否定である。Typee の序言の中にも「ありのままに」just as they occurred 記述したとか、「ありのままの真実を語る」to speak the unvarnished truth とあり、Omoo の序にも「正確な観察」correct observations とか、「ただ見たままを描いただけ」has merely described what has seen 等々、くどいまでに事実性を語り、客観性を主張している。これらの言葉を額面通りに受けとって、これらの作品が無色透明な、ただ単なる異常な体験の記録と言い得るだろうか。答は否である。両作品の問題となる各章を読んでみると、冷静に客観的事実だけを伝えるのだという序文の言葉とはうらはらに、突然物語の主人公を無視して、また読者心理をふみにじってまでも、作者メルヴィルが舞台におどり出てくるのに気がつく。それもたかぶった、動揺した姿で介入してくる。このことは、これらの作品が、いわば何々白書といった非人格的な、単たる体験報告ではないということを、従って、そこには作者の内面にある何かが、仮に「しこり」とでも名付けてもいいような、何かもやもやしたものが癡り固まって露出していることを意味するものと考えられる。必ずしも書かなくともいいものであるが、つい筆がすべって、足を踏み込み、手を汚してしまっているような箇所、そういった部分にこそ、作者メルヴィルの「しこり」が「作家的欲求」⁴¹⁾ がにじみ出ているように思われる。こういう種類の仕事にメルヴィルは書くことの快感を、作家的楽しみを見出していたように思われる。

これらの「主人公の時間」を無視してまでも、読者を「作者の時間」にひきずりこんで、作者が正面から堂々と注釈を加える、いわゆる「作者介入」の数章、具体的には Typee の改訂アメリカ版で削除（加筆、書き替えを含め

て)された箇所と、ダイキルクへの手紙に見られる *Omoo* の中でメルヴィルが、あらかじめ論争をよびそうだと気にかけていた数章の内容を検討することによって、ノンフィクション作家という強制の枠の中で、メルヴィルの作家的欲求がどういう方向にあったかを探ってみたい。

さて、実際に *Typee* の削除、訂正、書入れを検討するにあたって、当然断わっておかなくてはならないことは、ここで問題とする削除、訂正、書入れは、いわゆる「本質的要素」substantives、「意味をあらわす読み方」significant readings に限るという点である。意味に重要な影響を与える「読み方」readings のみを取りあげ、綴り、句読点、頭文字の使用法、行の分け方等のテキストの形式的体裁に関する「付属的要素」accidentals は、この稿の性質上問わないことにしたい。*Typee* の“substantive variants”に関しては、The Northwestern-Newberry Edition の *The Writings of Herman Melville* 中の *Typee* に詳しいが、本稿では確たる“American Edition, Revised Text”(1846-76)を入手することが出来ないので、止むを得ず手もとにある明らかにその流れをくむ版本と思われる Dodd, Mead and Company (New York) の *Typee*⁴²⁾ (Illustrated by Mead Schaeffer) と、1922-24 年の Constable Edition の reprint 版である Russell & Russell (New York, 1963) の *Typee* とを校合のためのテキストとして選定した。勿論 The Northwestern-Newberry Edition の“List of Substantive Variants”を参照したが、本稿での削除、訂正、書入れの頁、行の数え方は Russell & Russell の *Typee* によった。

(削除-1) Preface: viii. 22-ix. 8 There...digressions. (未確認)

約一頁の削除の内容は(1)南海での伝道活動に対する攻撃は、著者の敵意、悪意の表白ではなく、客観的報告であって(2)サンドウィッチ、マーケサス、ソサイエティー各諸島の最近の変貌ぶりは、英米にとっても極めて興味深い主題であるから、作者の脱線も許されるべきである、とする弁明である。ありのままを記録したこの作品において、作者は何ら評言をさし挿まない、と言う。

(削除-2) ch. 1: 1. 4-6 (title) The…Nukuheva.

第一章の本文の削除箇所の内容に合わせて、表題の不要なものを除去している。

(削除-3) ch. 1: 1. 19-28 Oh…land?

大西洋を僅か十四日ばかり航海した特等室の客が、さも海の生活の厳しさを体験したごとく語るのを耳にするにつけても、われわれの六カ月間島影一つ目に入らない航海が、どれほど過酷なものであったか分ってもらえるだろう。たらふく食って、おしゃべりをして、シャンペンを空けて、一日十時間も眠りながらの、ふやけた船客に本当の船上の窮乏、苦難が分ってたままるものか…と語気激しいこの箇所は、おそらくその語調の激しさのために、たまたま切り落したものと思われる。

(削除-4) ch. 1: 5. 6-14 Among…subject.

マーケサス諸島は、あのクック James Cook (1728-79) でさえも殆んど素通りしていて、われわれの知識も二、三の概括的な記述がもとになっているにすぎない。その中でも一応注目すべき資料は、Captain Porter の *Journal of the Cruise of the U.S. frigate 'Esex,' in the Pacific, during the late War* と C.S. Stewart の *A Visit to the South Seas* であると記していた *Typee* 創作上の種本の一部と思われる資料紹介を落している。この傾向は以後も頻繁にあらわれるが、出典をできるだけあいまいにし、場合によっては伏せようとする改作意図があったことは否定できない。

(削除-5) ch. 1: 5. 24-8. 32 The…catastrophe.

おおよそ三頁半の削除で、上記粉本の一冊と思われる W. Ellis の *Polynesia Researches* が伝えるかつてのマーケサス諸島への Protestant 伝道の失敗例をあげた後、最近のエピソードが語られる。度重なる伝道活動の失敗の結果、若く美しい宣教師の妻を前面に押し出して、伝道の突破口としようとする試みがとられることになる。当初はこの思いつきがまんまと成功するが、物珍らしさが消え去る頃には、島人に彼女の「女性」をかぎつけられ、ついほうほうの体で宣教師と子ども島を逃げ出す。この “Adventure of a Mis-

sionary's Wife among the Savages”と題される挿話の後には、島に立寄ったフランス艦隊の招待を受けた島の王夫妻の様子が記される。中でも胸もあらわな島の女王の解放的エロティズムによって、フランス水兵が卒倒するあたりが、もっとも筆すべりがよく、明らかに前記白人妻の羞恥心との対照を計算に入れての書きっぷりである。風紀上好ましからず、ということで削除の対象になった部分。

(書入れ-1) ch. 1

大幅削除のため生じた内容上の乱れを矯正するべく、章末に次の章句を加えている。

Indeed, there is no cluster of islands in the Pacific that has been any length of time discovered, of which so little has hitherto been known as the Marquesas, and it is a pleasing reflection that this narrative of mine will do something towards withdrawing the veil from regions so romantic and beautiful.

実際、既に発見されて相当の年月を経ている太平洋の島々の中でも、マーケサス諸島ほど今までに知られていないものもなかろう。この私の物語が、これほどロマンチックでもあり、美しくもある土地から、ヴェイルを取り除くことに多少とも貢献することを思えば、愉快に感じるものである。

(削除-6) ch. 2: 17. 24-27 What...us?

ドリー号 *the Dolly* の入港を待っていたかのごとく、押し寄せてきた島の御婦人方の、ほとぼしるような若々しさを目のあたりにしては、われわれ独身船乗りがどうして誘惑に克てよう、と書いていた四行。

(削除-7) ch. 2: 18. 15-17 Not...gratification.

(削除-6)と同様、官能的、挑発的な描写の箇所ということになるだろうが、前後を残してでもこの三行を削らなければならないほどの必然性は見当たらない。

(削除-8) ch. 3: 19. 2-7 (title) Some...Lady.

“Some Account of the late Operations of the French at the Marquesas—Prudent Conduct of the Admiral—Sensation produced by the Arrival

of the Strangers—The first Horse seen by the Islanders—Reflections—Miserable Subterfuge of the French—Digression concerning Tahiti—Seizure of the Island by the Admiral—Spirited Conduct of an English Lady.” (削除-9) に見られる大削除のために不要となったのが、これらの初版第三章の表題であり、その削除内容はここに要約される。これらの表題を削除したかわりに、初版第四章の表題の前半 (State of Affairs about the Ship—Contents of her Larder—Length of South Seamen’s Voyages—Accounts of a Flying Whale-man—Determination to leave the Vessel—The Bay of Nukuheva—The Typees) をもって来て、その内容も下記 (削除-9) の一文を加えて、そっくり初版第四章のものをあてている。従って、ここで完全に一章が欠落して、各章の数え方が順次ずれている。

(削除-9) ch. 3: 19. 9-23. 21 islands; the…opinion.

初版第三章の書き出しの部分 “It was in the summer of 1842 that we arrived at the islands;…” の islands の次にあった; を. に改めてここで切り、以下約四頁半を思いきりよく切除した箇所。デュプティ・トゥール Du Petit Thouars, プリチャード W. T. Prichard の実名をあげながら、1842年のフランスによるマーケサス諸島、およびタヒチ島の掌握という歴史的事件を描く。十九世紀のあらゆる場所で起った事件の繰り返しの一つにすぎないが、旗艦ラ・レーヌ・ブランシュ the *Reine Blanche* を入江に入れ、大砲を向けておいて、国旗侮辱とか、フランス人居住者の財産が不当に脅かされたとか名目をたてて、二万ドル、あるいは三万ドルの賠償金を要求し、支払不能を理由に、島を支配下にくりこんでしまう、というフランスによってとられた公式通りの手続が克明に記される。

(削除-10) ch. 4: 24. 5-6 (title) Invasion…Admiral.

“Invasion of their Valley by Porter—Reflections—Glen of Tior—Interview between the Old King and the French Admiral.”

(訂正-1) ch. 4: 28. 15-19 though…Japan.

捕鯨船の航海の長いことを述べたしめくくりとして、「ここで私は自分の

正直な人間としての信義にかけて、次のことを書いておこう」I may here state, and on my faith as an honest man, that though…Japan. と書かれていた文の though 以下, “though more than three years have elapsed since I left this same identical vessel, she still continues in the Pacific, and but a few days since, I saw her reported in the papers as having touched at the Sandwich Islands previous to going on the coast of Japan.” を “some time after arriving home from my adventures, I learned that this vessel was still in the Pacific, and that she had met with very poor success in the fishery. Very many of her crew, also, left her; and her voyage lasted about five years.” と書きかえている。

(削除-11) ch. 4: 32. 1-37. 28 I…reflections.

六頁近い削除は “European Cruelties” の一語に要約されよう。ヨーロッパ人の残酷さを前にして、南太平洋の島々の原住民が「野蛮人」にならざるを得なかった歴史的過程が、さまざまに述べられる。ヨーロッパ製の “big canoe” が未開の岸辺にはじめて近寄った時、彼等は両手をあげて迎えに出た。けれどもこれに対する白人の応答は、武器をふりまわしての略奪でしかなかった。彼等未開人を「野蛮人」にさせたのは、他ならぬ白人であった。彼等は未開人ではあっても、断じて「野蛮人」ではなかった。一体文明人と野蛮人の区別は何なのか、文明とは何なのか⁴³⁾、とメルヴィルは問う。一つの未開社会のカプセルが侵入者によって破られ、それが文明に直面した時、その中にそれまで長く続いてきたゆるやかな自然な生活のリズムは完全に崩れ去る。この悲劇的出あい、未開人たちはただヨーロッパ人の破壊と蹂躪の対象でしかなかった、とする激しい調子の植民地拡張政策批判がこの箇所のものである。

(訂正-2) ch. 12: 120. 4-7 and…removing

主人公が小川で水浴をしよとすると、見物客が集まってくる。「私はその一同の中に女性のまじっていることに、少々気恥しい思いをしたが」Somewhat embarrassed by the presence of the female portion of the company, に

続く箇所 “and feeling my cheeks burning with bashful timidity, I formed a primitive basin by joining my hands together, and cooled my blushes in the water it contained; then removing…” を “but nevertheless removed”⁴⁴⁾ と簡単に手直した後、次行の “bent over” の二語を削っている。水夫服を脱いで、流れて上半身を洗う際に「屈みこんで」bent over という表現まで削除の対象にした作者の感覚は、残念ながら共有できないが、ともかくメルヴィルの手直し作業を知る上では恰好の一例である。

(削除-12) ch. 12: 120. 25 and…waist

同じ水浴場面にある “and revealing their naked forms to the waist” という一行。

(削除-13) ch. 14: 148. 21-24 And…and

島の娘たちの言葉で「アカ」と呼ばれる香高い油を、彼女たちがその軟かい手で身体に塗ってくれる時、この時こそ一切の苦難を忘れる最高の瞬間である、と書いていた四行を削ったのも、勿論、(訂正-2) (削除-12) と同一線上のものである。

(削除-14) ch. 17: 164. 3-5 (title) Their…People

“Their Enjoyments compared with those of more enlightened Communities—Comparative Wickedness of civilized and unenlightened People”

(削除-15) ch. 17: 165. 20-168. 5 As…crimes.

(削除-11) と同傾向の内容で、量的にも約三頁と多い。同じ削除でも、例えば (削除-12, 13) のようなごく僅かの手直しと、何頁にもわたる削りとりとを同列に置いて眺めるべきでないことは、言うまでもないことであって、後者の中心テーマは常に南海での伝道活動に対する疑問を手がかりとした、白人文明批判である。

まず数箇所を引用してみると——ヨーロッパ人が持ち込んだ害毒や病気の解毒剤として送りこまれた宣教師の努力の成果は、はたしてどの程度のものであったかという問に対しては、

Let the once smiling and populous Hawaiian islands, with their

now diseased, starving, and dying natives, answer the question. The missionaries may seek to disguise the matter as they will, but the facts are incontrovertible; and the devoutest Christian who visits that group with an unbiased mind, must go away mournfully asking —“Are these, alas! the fruits of twenty-five years of enlightening?” (p. 166)

かつて微笑せる、人口豊かなハワイ諸島が、今は惨めで、飢えた、死せる原住民の島と化している事実をもって、この間の答としよう。宣教師たちは、この事情を好きなように言いつくろいもしようが、事実はおおいがたい。そして、この島を訪れる偏見のない最も敬虔なキリスト教徒でさえ、哀れな声で、「ああ、これが二十五年間の啓蒙の成果なのか」と尋ねて、去ってゆくにちがいない。

「野蛮」という言葉が、しばしば誤まって使われるのが混乱のもとで、むしろ白人の野蛮さを矯正するべく、四、五人のマーケサス人が宣教師として、合衆国に渡る方がよろしい、と手厳しく書いておいて、矛先を転ずる。

The fiend-like skill we display in the invention of all manner of death-dealing engines, the vindictiveness with which we carry on our wars, and the misery and desolation that follow in their train, are enough of themselves to distinguish the white civilized man as the most ferocious animal on the face of the earth. (pp. 166-167)

われわれ白人が、ありとあらゆる人殺し機械を考え出すことにおいて示す悪魔のような巧みさや、われわれが、戦争を遂行する際の執念深さ、そして、戦争のあと続いて訪れる悲惨と荒廃——こうしたことはそれ自体で十分白色文明人が、この地球の表面で最も狂暴な動物であることを明らかにしている。

(訂正-3) ch. 18: 176. 31-34 I...mermaids,

部落の若者たちと、近くの湖で丸木船を漕ぎまわり、ふざけて楽しんでいても、人魚たちがいなくては、と“*But*”に続く“*I was ever partial to what is termed in the Young Men’s Own Book, ‘the society of virtuous and intelligent young ladies’; and in the absense of the mermaids,*”が“*this was far from contenting me. Indeed, I soon began to weary of it, and*

longed more than ever for the pleasant society of the mermaids, in whose absence”と改稿されている。

(削除-16) ch. 18: 178. 20-21 on…another

恋人フアヤウェイ Fayaway との船遊びの描写の一節 “on the very best terms possible with one another” も既出のものと同じ傾向のもの。

(削除-17) ch. 20: 204. 24-27 In…myself.

若い娘たちが月光の中で踊るダンスは、私のような高い倫理水準を持った男性には、あまりに官能的でありすぎた、とある四行も同じ。

(訂正-4) ch. 20: 204. 30-31 they…wing.

彼女たちの踊りの様子は、“they look like a band of olive-coloured sylphides on the point of taking wing” から “one would almost think that they were about to take wing” に書き換えられている。改訂アメリカ版の Preface に述べられている “some slight modifications of style”⁴⁵⁾ に該当するものであろう。

(訂正-5) ch. 23: 222. 15-16 for…benefactors

南洋諸島にはどこにでも生えている木の根アークヴァ arva から抽出した樹液が、瘰癧の治療に用いられてきたと語る箇所、この病気を説明した “for whose frightful inroads the ill-stared inhabitants of that group are indebted to their foreign benefactors” という表現を不穏当として “which for so many years has been gradually depopulating those fine and interesting islands” に変更。

(削除-18) ch. 24: 227. 2-4 (title) Inaccuracy…Valley

“Inaccuracy of certain published Accounts of the Islands—A Reason—Neglected State of Heathenism in the Valley”

(削除-19) ch. 24: 227. 11-229. 31 As…impossible.

マーケサス諸島に関するこれまでの記録が正確でない、とする約二頁半。メルヴィルによれば、宣教師、旅行者によって書かれたそれらの資料はすべて、現地で長期にわたる野外調査を行なった結果書かれたものではなく、甚

だ信憑性の乏しいものであるという。

(訂正-6) Ch. 24: 229. 32 For…part

“For my own part”を“Yet, notwithstanding all I observed on this occasion”と変更。

(削除-20) ch. 24: 241. 16-29 This…astray.

タイピー族の偶像崇拜の対象について語った後に、パンの木も、ココナツの木も、放っておいても豊かな収穫が約束される南海の神学は、万事南海ペースで行なわれていて、われわれの厳しい信仰の世界とは、別の次元でとらえるべきものだ、とする半頁が削除対象になる。

(削除-21) ch. 25: 244. 12-27 I…life.

白人との接触を免れているタイピー溪谷の未開人の方が、ヌクヒヴァ湾近くの既に白人による汚染地区に入っている地の住民よりも、どれだけ幸せか分らない。名ばかりのキリスト教徒になると同時に、白人の文明に汚される位なら、たとえ食人種と呼ばれようとも、現状のままの方がどれほど彼等にとっては幸福であるか知れない。——これまた、これまでに繰り返し主張されてきた抗議であって目新しくはないが、これがタイピーの谷の住民の肉体的な美しさを述べる時にあわせて語られる。

(削除-22) ch. 25: 247. 8n (247. 30-36) This…1613.

マーケサス諸島の発見者であるメンダナ Mendanna の航海記録係であったフィーゲロア Figueroa の筆になるマーケサス人印象記を逐次引用した最後に付していた出典、*Circumnavigation of the Globe* の注を削除。

(削除-23) ch. 25: 247. 8-248. 10 More…beauty.

これまでの記録に目を通すと、クック James Cook はその航海記でマーケサス人を南海で最も魅惑的と記し、スチュワート Stewart は *Scenes in the South Seas* の中で、一度ならず女性の美しさを称え、ファニング Fanning も同じく彼等の肉体的美しさを特記し、ポーター David Porter も女性が特に素晴らしいとしている。ヨーロッパ人に近い容姿を持つマーケサス人は、他の太平洋諸島の住民と比べて、遙かに美しく、完全無欠の美の原型が

そこにはある、と彼等は言う。

(削除-24) ch. 25: 250. 22-251. 7 The…mistress.

タイピー族は酋長制度の下に、明確な階級的身分制度をとりながらも、タヒチやハワイ諸島に見られるような、酋長を頂点とする強力な権力構造は持っていないとして、タヒチでは、身分の低い者が許可なく王の居所に近づくだけで、死刑の対象となり、サンドウィッチ諸島では、女王カーフマヌ Ka-ahumanu が暴政の限りをつくしている、と記述していた約半頁。

(削除-25) ch. 26: 253. 2 (title) Allusion to his Hawaiian Majesty

(削除-26) ch. 26: 253. 7-10 (title) A…Reflections.

“A Warning—Some Ideas with regard to the Civilization of the Islands—Reference to the present state of the Hawaiians—Story of a Missionary’s Wife—Fashionable Equipages at Oahu—Reflections.”

(削除-27) ch. 26: 253. 13-254. 18 of…appellation?

ヨーロッパ製の安ブランディ―と砂糖菓子で体質が変わってしまったハワイのタマハマハ三世 King Tammahammaha III を描くには、“gracious majesty” “blood royal” といった表現は相応しくないとした半頁。

(削除-28) ch. 26: 253. 17 n (253. 18-36) Accounts…grovelling.

サンドウィッチ諸島に白人が侵入して以来、酋長たちは以前にもまして金銀で身を飾り、感覚的生活に溺れている反面、一般島民は食べることに窮している。一般的に酋長の生活のきらびやかさは、そのまま大衆の生活の惨めさを暗示するものと言えるが、両者の末路は結局同じであって、悲しい滅亡以外にはあり得ないだろう、と書いていた(削除-27)に付けていた注を不要としている。

(訂正-7) ch. 26: 254. 19 King…Valley

“King of the Cannibal Valley” を “king over all the Typees!” に変更しているが、“Cannibal” を意識的に削ったものか。

(削除-29) ch. 26: 254. 20-24 May…civilization.

タイピーの楽園を西欧の冷酷な攻勢から護ることができるのならば、どう

かタイピー族のメヘビ王は、いつまでも悪強い酋長であり続けてほしい、と書いていた五行。

(書入れ-2) ch. 26:

(削除-29) のために出来た空白に挿入したのが「だが、この大はしゃぎの後再び真面目にかえろう」“But to be sober again after this royal burst”の一文である。

(訂正-8) ch. 26: 254. 30-31 have…another

“have a sort of nuptial understanding with one another”に“live together quite sociably”と筆を加えるが、“nuptial”あたりを気にしたのであろうか。

(訂正-9) ch. 26: 254. 33-255. 2 had…happening.

ポリネシアの島々の大部分がそうであるように、タイピー族の婚姻は女性中心であって、娘たちはまだ子供気の失せない頃に若者から求婚され、それに応じる。けれどもこの後で第二の、さらに年長の求婚者があらわれ、その少年少女を共に自分の住居へ連れてゆく。その後は三人で円満に生活を始める—という話題の中で“had the audacity to take various liberties with the lady, and that too in the very presence of the old warrior her husband, who looked on as good-naturedly as if nothing was happening”と書いていたところを、用心深く僅か数語に固めて“appeared to be equally at home”と変えている。当然のことながら用心深く補筆した箇所は、すべてある種の「こわばり」⁴⁶⁾が見られ、筆の走りは悪い。

(削除-30) ch. 26: 255. 30-31 but…hereditary.

“but on second thoughts, tattooing is not hereditary”を削っているが、数週間の滞在で言葉も通じないという条件の下では、ここまで断言するのは体験実話、ノンフィクションをうたう作品の性質上困る、と考えたのであろうか。

(削除-31) ch. 26: 255. 34-256. 3 I…lovers?

タイピーの老酋長メヘビと、十五歳ばかりの青年が二人でムーヌーニ

Moonoony という若い娘と “making love at the same time” しているのを時々見かけたことがある、と書いていた箇所。

(削除-32) ch. 26: 256. 28-29 Married…them.

“Married women, to be sure!—I knew better than to offend them.”

(削除-33) ch. 26: 257. 3-12 Where…it.

タイピー族の一妻多夫制にふれ、われわれにはとても考えられないことだと評した数行。

(削除-34) ch. 26: 257. 18-19 I…that

「いずれにしろ、長ったらしい求婚などタイピーの谷には縁のないことである」という文章に挿入していた “I have more than one reason to believe that” を (削除-30) と同じ理由からであろうか、外している。

(削除-35) ch. 26: 258. 18-33 A…hundreds.

一妻多夫制であるが夫婦ともに不貞行為は非常に稀であって、この点でもマーケサス人は他の諸島の例とは異なると語り、タヒチの場合をあげている。

(訂正-10) ch. 26: 258. 34-35 Notwithstanding…Typees

“Notwithstanding the existance of wedlock among the Typees” をわざわざ “But notwithstanding its existance among them” と書きかえる。

(削除-36) ch. 26: 259. 11-35 The…ratio.

ポリネシアの人口の自然増は、どの島でもごく僅かであるのに、白人が渡来して以来その人口は減少の一途をたどっている。白人が未開の島々に持ちこんだ害悪は、現地人の出産率の低下⁴⁷⁾ という副産物まで生みつつある、と主張していた箇所約一頁。

(削除-37) ch. 26: 262. 24-268. 21 The…good.

この最後の六頁にわたる大削除で、十三箇所の削除と三箇所の訂正によらずたずたに切りきざまれた第二十六章が終わる。この箇所数頁を約言すれば、ここにも宣教師の姿、伝道活動の色々な矛盾⁴⁸⁾ を糸口にして、白人の進攻による未開人の滅亡を悲しみ、文明を憎悪するこれまでに散見されたパターンの繰返しがある。表現は違っても、挿話は別であっても、主張は一つで

ある。メルヴィルの言葉によれば——自然がその苗を植えたパンの木や、バナナの木が、やがて時と共に豊かに実り、島民はただ手をのびささえればよい。このような「天国のような居住地」*paradisiacal abode* にも、文明という美名のもとに、キリスト教化というスローガンを掲げて、やがて白人たちが押し寄せてくるだろう。

Among the islands of Polynesia, no sooner are the images overturned, the temples demolished, and the idolaters converted into *nominal* Christians, then disease, vice, and premature death make their appearance. The depopulated land is then recruited from the rapacious hordes of enlightened individuals who settle themselves within its borders, and clamorously announce the progress of the Truth. (p. 263)

ポリネシア諸島では、偶像が覆され、礼拝所が破壊され、異教徒が「名前だけの」キリスト教徒に改宗されるが早いのか、病気、悪徳、早死がたちまちその姿をあらわす。かくして人口の減った土地へ、死んだ者の後釜として、貧欲な文明人が群をなしてやってくる。そして彼等はあちこちに居を構え、「真理」の進歩をやかましく叫びたてる。

白人たちによって美しい庭園が造られ、芝生が植えられて島は変わってゆくが、島民たちは父祖の地に住んでいながら、自らを余所者と考えたままに取り残される。かつてはふんだんにあった果実も、惜し気もなくもぎ取られて、飢える島人を尻目に、白人の口に入るか船で持ち去られてしまう。自然の恵みを受け得なくなった島民は、汗して働けと白人から命ぜられても、元来労働の何たるかを知らない彼等にそれが出来る訳がない。食料不足、病気、悪習が忽ちにして彼等の息の根を止めてしまう。しかるに現地の宣教師たちの行動はどうだろう。こんな話を耳にした。ある宣教師の妻は馬車を引かせる馬にこと欠いて、現地人を二人馬代わりに使い平然とその素膚に鞭をあてていた、と。しかしここで読者にどうしても諒解してもらいたいことは、こうしたエピソードを語るからといって、宣教師の努力に水をさし、聖書的な世界観に疑いを抱いていると考えてもらっては困る、という点である。現

地の宣教師たちの努力は認めるが、残念ながら伝道にあたるのは生身の人間である。ともすれば誤りを犯し、誤解を招く。さまざまな困難を克服してついには島民を改宗させることに成功した宣教師の話を書物で読むことと、サンドウィッチ諸島にみずから出向いて、現地で行なわれている伝道活動をつぶさに見ることとは、まったく別のものであって、宣教師たちは絵のような別荘に住み、島人たちは名目だけの改宗で、およそキリスト者の生活とは程遠い毎日を送っている。勿論その責任は伝道活動に携わる人々よりも、むしろ島に立ち寄る夥しい数の白人に負わされるべきものではあるが、一言で言えば、文明が未開と接する時その福音は消え去り、害悪のみがまき散らされ、その破壊を前にして無力な島民は、ただひたすらに彼等の悲しい宿命をじっと見つめることしか出来ない。彼等には救いはない—とメルヴィルは書く。(削除-38) ch. 27: 269. 3-270. 12 I...attributed.

タイピー族の社会秩序に関して記述していた一頁半であるが、内容は多分に主観的である。もっとも、どんな社会であれその家族制度、身分制度、土地制度といった社会の基本的構造を、言葉もまったく通じない僅か数週間の幽閉状態での観察によって、明らかにしようとする試みに作者が絶望した結果が、この主観的表白に姿を変えたとも考えられる。この箇所に関する限り、これまで随所に見られたいわゆる「調べた文学」的色彩も影をひそめ、素朴な形ではあるが、ここにはメルヴィルの理想とする夢の組織の原型がある。指図する者と指図される者、管理する者と管理される者との階層分化がはじまっていない社会、上からの秩序維持のための管理を必要としない社会、自由の本能が、原初的自由が生き生きと波打っている社会、この社会を作者はタイピーの溪谷に見た。メルヴィルによれば、この理想社会に見られる基本原理は、“honesty”と“charity”であるという。異教徒と言われ、野蛮人と蔑まれ、食人種とまで呼ばれているこのタイピー族の社会こそ、成文化された法の秩序を不要とする理想郷であるという。「自由の追求」の後にメルヴィルが僅かに垣間見たユートピアは、ここでいわばつぼみのままその舞台から降ろされてしまう。

(書入れ-3) ch. 27: 270. 12

上記削除との関連で、“There seemed to be no rogues of any kind in Typee.” と筆を加えて、ここから第二十七章をはじめている。

(削除-39) ch. 27: 271. 2-3 how…say.

タイピーの私有財産制にふれた後の “how secure an investment of ‘real property’ may be, I cannot take upon me to say” を削除。

(削除-40) ch. 27: 271. 11-15 to…behoof.

この溪谷の土地制度に関しては、ついに明確な答は得られずじまいであったが、考えようによっては、彼等はこの溪谷をフランス人が侵入してくるまで、自然から永代借用しているとも言えよう、と記述していた五行。

(削除-41) ch. 27: 272. 25-273. 28 Civilization…fellowship.

私のように先入観を持ってタイピーの谷に入った者でさえも、彼等を支配する “pure” で “upright” な原理には感嘆せざるを得なかった。夜毎、徳だとか、慈悲の心だとか説いている白人たちよりも、彼等の方が余程お互いに思いやりがあり、人間的である。

(書入れ-4) ch. 27: 273. 28

(削除-41) の一頁強にわたる穴埋めとして、“They lived in great harmony with each other.” を挿入。

(訂正-11) ch. 29: 283. 7-10 I…Typee?

“I think I must enlighten the reader a little about the natural history of the valley. Whence, in the name of Count Buffon and Baron Cuvier, came those dogs that I saw in Typee?” といかにもメルヴィルらしい筆跡をとどめていた初版を書き変えた結果は、味も素っ気もない “There were some curious-looking dogs in the valley.” という表現である。

(訂正-12) ch. 30: 300. 16-17 has…narrative

私はチオール湾でタブーの効力の著しい例を目撃したことがある、と語り、その地を訪れたことは、“has been alluded to in a former part of this narrative” と記していたものを “occurred a few days before leaving the

ship”に訂正。

(削除-42) ch. 30: 303. 10-16 The… it.

ポリネシア各語の動詞活用の複雑さを強調し、ジョウズ Sir William Jones でさえも、それをマスターすることをあきらめるであろう、と書いていた箇所。

(訂正-13) ch. 31: 308. 34-35 like… window-curtain

タイピーの乙女たちの艶やかな髪を描く時に使った “like the swag of a small window-curtain” という形容を, “whether it be built up in a great tower, with combs and pins, or is plastered over the head in sleek, shiny folds” と変更。

(削除-43) ch. 32: 314. 10-315. 11 The… toe.

ポリネシア人たちは、ヨーロッパ人の食人習慣に対する嫌悪を十分知っているので、必ずその存在を否定し、その痕跡を隠そうとする、と述べた後に入れていたクック船長にまつわる挿話を、一頁にわたって落している。

(書入れ-5) ch. 32: 315. 11

大幅な外科的切り取り手術のあとに必ず短い文章を添加してきたこれまでの例にみられるごとく、ここでも “But to my story.” と行を変えて書き加えている。

(訂正-14) ch. 34: 333. 30-32 the… ‘Mother.’

タイピー溪谷から脱出するクライマックスの場面で、老マルへヨ Marheyo が以前私が教えた一つの英語を力強く発音したとして “the only two English words I had taught him—‘Home’ and ‘Mother.’” と書いていた初版に手が入って “one expressive English word I had taught him—“Home”” と ‘Mother’ を削除している。

(訂正-15) ch. 34: 337. 9-10 with… Gift,

同じやま場で、マスケット銃をコリコリ Kory-Kory に手渡した時の私の気持を “with a rapid gesture which was equivalent to a ‘Deed of Gift’” と記していたのを “in doing which he would fain have taken hold of

me.”と、逆に相手の感情を写すよう書き替えられている。

(削除-44) Appendix: 341-348 APPENDIX…END

六頁近い Appendix を約言すれば、1843年のホノルルでの米英仏の抗争の報告と言えよう。たまたまメルヴィルのホノルル滞在四か月間が、カメハメハ三世をめぐる列強の駆引の時期であった上、アンダースン Charles Robert Anderson も考察しているように⁴⁹⁾、ホノルルでメルヴィルが働いていた頃の前記雇主モントゴメリーから非常に正確な情報を入手した上で書かれたものと思われる。この Appendix で語られる内容が、公式記録と比べてみても極めて正確なものである、とアンダースンも認めているが、要約すれば—1842年暮にホノルルを発った英領事チャールトン Charton の後任に、翌年2月11日にはポーリット Lord George Paulet がホノルルに着き、カメハメハ三世に五カ条から成る要求をつきつける。カメハメハ三世は止むなく同月25日に仮の領土割譲条約にサインすると同時に、合衆国大統領タイラー John Tyler (1790-1862) に仲裁を求める。その結果同年6月11日には米国のカーニーー Lawrence Kearney がホノルルに着き、これに抗議を行なう。そしてついに同年7月31日に、再びカメハメハ王朝の存続が承認される⁵⁰⁾。これを祝って三世は十日間というもの、すべての“moral, legal, and religious restraint”を破ってもよろしい、という通達を出す。この十日間にホノルルでどのような光景が展開されたか。残念ながら、答は悲しいものである。ミショナリーの努力によって表面上は敬虔なキリスト者になったかに見えた島人の、一皮むいた以前の異教徒時代とまったく変わらない姿がそこにはあった。サンドウィッチ諸島の島民は、結局は悲しい名ばかりの改宗者でしかなかった、と結論を下さざるを得ない。

これら合計六十箇所を越える変更の中で、改訂アメリカ版で削除された部分だけを総計すると約四十頁に及ぶ。*Typee* 三百七十頁のうちの四十頁といえば、量的には約九分の一にあたるが、これら四十頁を抜き取り、さらに修正を加えた作品を考えてみると、問題は量的な多少よりもむしろ作品内容の

変化である。確かに改訂版ではメルヴィル特有の脱線、饒舌は姿を消して、物語の展開はスムーズになったであろうが、四十頁を削り落された *Typee* は、まったく毒気を抜かれた作品、棘をもがれた書物と化したと言わざるを得ない。作者の客観的報告だとする証言にもかかわらず、非常に主観的なものをぶつけていることは明らかである。メルヴィルという作家は先にもふれたように、常に禁欲的でなければならぬレポーター・タイプには、徹しきれなかったと言えよう。自らを無機物化できなかつたメルヴィルが、1842年の南太平洋という激しく移り変わる地点に立って、その現実をとらえ、その体験を四年後に作品の中に投げ込んだ際に、その対象処理にあたって、つい冷静な立場を崩して、そのフィルムを濃い現像液で仕上げる結果になったという事情は、十分に肯けるものがある。1842年のマーケサス諸島、タヒチ島という対象の処女性はこれだ、と切り取ってみせた点は十分評価してよいと思われる。

次に *Omoo* の問題となる数章であるが、まずメルヴィルが削除したと述べていた第五、七、十七の各章は、現在の作品にあたってみると、前後の内容から判断して、手紙に指定された章の数え方が一章ずつ、ずれているものと思われる。つまり、どこか一章だけ欠落した形跡が強く、*Omoo* の第十章までは捕鯨船ジュリア号の描写が中心であり、第十八章がタヒチの歴史を記述した章であることを考えると、この第十八章に近い第十七章だけが削除されたとも考えられる。したがって、ここでは *Omoo* の第三十二章、第三十三章、および第四十四章から第四十九章までを対象にして、中でも二重下線を施されている第三十三、四十八、四十九の各章に当然のことながら力点を置きながら、各章の内容を検討してみる。

第32章 “Proceedings of the French at Tahiti”

1842年、タヒチ島という政治的に興味深い地点に立って、フランス人のこの島における行動の一端をここに語ろう。その資料となるものは、当時の島民の間に行なわれていた風聞に、後年再訪問の時に耳にしたこと、および本

国に帰ってから目にした信頼すべき記録を加えたものである、として、まず英仏の Protestant と Roman Catholic との抗争、確執を描き、やがてフランス人神父の虐待を理由にデュプティ・トゥアール提督率いるフランス海軍によるタヒチ占領の様子が語られる。国旗侮辱、フランス人居住者の財産の保護、等を根拠に、土着女王ポマレ Queen Pomare Vehine III に一万ドルという巨額の損害賠償を要求し、その支払い不能を楯にタヒチの保護領化を完了させる。タヒチもあの十九世紀にあらゆる地点で発生した事件のくり返しにすぎず、この軍事的支配が完了した後に送りこまれてきたフランス人宣教師と、先住のイギリス人宣教師との摩擦を次のように描いて、この章は終わる。

Under far better auspices, they might have settled upon some one of the thousand unconverted isles of the Pacific, rather than have forced themselves thus upon a people already professedly Christians. (*Omoo*, p. 147)

フランス人神父たちは遙かに有力な保護の下にあるのだから、既に表面だけはキリスト教徒になっている島民の中に、強いて入り込んでくるよりも、太平洋上に未だ改宗しない島が幾千となくあるのだから、どこかそうした所に落着く方が、むしろよかったであろう。

宣教師たちが静かに福音伝道活動を行っていた時代がここに終わり、タヒチは次第に西欧の政治へとまきこまれてゆく。宣教師たちもその事業をつづけてゆくためには、どうしても政治的後援を得なければならないことを自覚する時代の幕あけ、それが 1842 年である。

第 33 章 “We Receive Calls at the Hotel de Calabooza”

捕鯨船 *ジュリア* 号の反乱に加わった主人公が収容されていた監獄 the Calabooza Beretanee で見たものは、白人との接触によってもたらされた病氣、畸型に苦しむ汚された楽園の姿であった。白人がこれらの島々を発見するまでは未聞の病氣であった象皮病に対しても、島民はまったく治療を試みないし、治らないものとあきらめてしまっている、と記した後、ルールートゥ Roorootoo 島でこの病氣に苦しむ白人の挿話がつづく。

第44章 “Cathedral of Papoar—The Church of the Cocoa-Nuts”

第45章 “A Missionary’s Sermon ; With Some Reflections”

第46章 “Something about the Kanakippers”

これら南太平洋の島々での「ロンドン伝道協会」the London Missionary Society から派遣された宣教師に代表される伝道活動のさまざまな側面を描写した三章は、やがて展開されるであろう植民地政策に対する批判、白人文明に対する疑惑の下準備としての、伝道活動に対する作者の不信感の表白である。南海の教会堂で行なわれる説教を嘲笑し、島民の媚態をえぐり出し、宗教警察官を使って教会に人を集めようとする馬鹿さ加減を説くこれら三章から、作者の伝道に対する疑惑を汲み取ることは簡単だが、その攻撃はこれら初期の伝道者たちの狭量と、正直一途な愚かさ集中されていて、勿論キリスト教そのものへの抗議ではない⁵¹⁾。むしろ南海での困難な伝道活動がかかえていたさまざまな矛盾を、激しく批判、告発する作者の信仰に対する熱い情熱を読み落すべきではないし、又事実、真の攻撃目標は伝道活動には置かれていない。メルヴィルの語るところによれば、南海での説教の内容は、単純な聴衆の注意をひくようにと「蒸気船のことだの、ロンドン市長の馬車のことだの、ロンドンにおける消火方法だのについて」about steam boats, lord mayor’s coaches, and the way fires are put out in London (*Omo*, p. 204) といった類の話を枕に使ってはいるが、英仏の宣教師たちのいがみあいが絶えず顔をのぞかせる、という。

‘Good friends, I glad to see you ; and I very well like to have some talk with you to-day. Good friends, very bad times in Tahiti ; it make me weep. Pomaree is gone—the island no more yours, but the Wee-wee’s (French). Wicked priests here, too ; and wicked idols in woman’s clothes, and brass chains.

‘Good friends, no you speak, or look at them—but I know you won’t—they belong to a set of robbers—the wicked Wee-wees. Soon these bad men be made to go very quick…Why Beretanee so great? Because that island good island, and send *mickonaree* to poor *kannaka*. In Beretanee, every man rich : plenty things to

buy; and plenty things to sell. Houses bigger than Pomaree's, and more grand. …

'Good friends, little to eat left at my house. Schooner from Sydney no bring bag of flour: and kannaka no bring pig and fruit enough. Mickonaree do great deal for kannaka; kannaka do little for mickonaree. So, good friends, weave plenty of cocoa-nut baskets, fill 'em, and bring 'em to-morrow.' (*Omoo*, pp. 204-205)

「皆さん、よくいらっしやいました。今日皆さんにお話したいこと沢山あります。皆さん今タヒチは大変不景気です。それを考えると涙が出ます。ポマレ王はいないです。島は皆さんの島ではない、ウィーウィー(フランス人)のものです。おまけによくない坊主がいます。婦人の着物にはよくない偶像がついています。真鍮の鎖もついています。皆さん、あんな人たちを見たり、話したりしてはいけません。皆さんそんなことしないでしょ。あれはみな泥棒です。悪いウィーウィーです。あんな悪い人たちは近いうちに追いはられます。……ベレタニー [イギリス] はなぜあんなに偉いのですか。あの島はよい島でミコナリー [宣教師] を貧しいカナカ [原住民] のため送ります。ベレタニーでは金持ちでない人ありません。買うもの沢山あります。売るもの沢山あります。家という家はポマレの家より大きいです。そして立派です。……皆さん、私の家に食べ物少ないです。シドニーのスクーターまだ粉を持ってきません。カナカは豚も果物もあまり持ってきません。ミコナリーはカナカのため随分つくします。カナカはミコナリーのため何もしません。ですから皆さん、ヤシの実入れる籠沢山作って、それを一杯にして明日持って来て下さい。」

そもそもロンドン伝道教会がタヒチ人をもって、将来もっとも有望な信者となるであろうと判断を下したことが誤りで、島民の一見して真摯かつ従順な態度を過大評価したのが失敗の一因である。彼等は実際には何の興味も感じないことでも、権力者とか、媚態を示せば好意を寄せてくれるであろう相手になれば、非常に熱心らしい態度をとってみせる。初期の宣教師たちは、ポリネシア人の先天的な気質としての偽善性に気づいていなかった、という。

第 47 章 “How They Dress in Tahiti”

タヒチ人の服装を記録した後に、土着の文化（舞踏、蹴球、凧あげ、笛、民謡、角力、槍投げ、弓術等）が白人によって禁止され、パンの実の採り入れ歌にいたるまで禁止令が出されるに至って、その意図は島民のために良かれかしとの真摯なものであろうが、その結果は意に反して、彼等は一層の倦怠と肉欲におぼれる悲しむべきものになってしまった、と記す。

第48章 “Tahiti As It Is”

第49章 “Same Subject Continued”

島民の一般状況を数章にわたって記述してきたが、

But, in the first place, let it be distinctly understood, that in all I have to say upon this subject, both here and elsewhere, I mean no harm to the missionaries, nor their cause: I merely desire to set forth things as they actually exist. (*Omoa*, p. 218)

しかし、第一にはっきり読者の諒解を求めておきたいことは、私がこの問題について発言する際に、この章において、又他の章においても、宣教師たちとその主張に対して、何らの反感を持つものではない、ただ事柄のありのままを記してみたいと思うだけである。

と前置して、島人の風紀が正され、聖書の島語訳が完成したことを高く評価する。彼等の境遇は宣教師の努力によって幾分改善されたとはいうものの、宣教師の恩恵を他の方面からもたらされる害悪に比べると、ほとんど取るに足らぬものになってしまう、とメルヴィルは一応の結論を下すが、

Upon a subject like this, however, it would be altogether too assuming for a single individual to decide; and so, in place of my own random observations, which may be found elsewhere, I will here present those of several known authors, made under various circumstances, at different periods, and down to a comparatively late date. (*Omoa*, p. 220)

こうした問題について、一個人として結論を下すのはあまりに僭越な企てとなるから、私自身の漫然たる観察はいずれ章を改めて述べることとし、ここには、時代を異にし、状況を異にし、しかも比較的近代にいたるまでの間に、有名な著者の行なった観察を並べることとする。

と書いて、資料引用をつづける⁵²⁾。

第 49 章では、タヒチ人の社会的現状が厳しい語調で語られる。自給自足の社会に西欧の工業製品が入りこみ、土着の製品は駆逐されるが、一般島民は外国産の品物を買うだけの経済力を持ちあわせていない結果、惨憺たる貧窮状態に陥っている。古い仕事を棄てて顧みないばかりか、新しい仕事を見つめる意欲すら見られない。タヒチ人をその怠惰の夢から呼び起そうとする試みは、幾度も繰り返されたがすべて失敗に終わった。数年前にも綿の栽培法が輸入され、島民たちは例の珍し物好みから、一時は飛びついたが、その興奮も忽ち消えて今では一ポンドの綿もとれない。機織機械もロンドンから送られ、工場がたち島の各地から志願者が集まったが、ものの数年も経た頃には、機械は取りこわしシドニーに送り返す結果となり、甘蔗の栽培も又同様の失敗に終わってしまう⁵³⁾。白人に打ち負かされ、絶望し、無力化したタヒチ人は酒びたりになり、島民の三分の二の血は梅毒に汚されている。途方に暮れた島人は説教中の宣教師につめよる。

'Lies, lies! you tell us of salvation; and, behold, we are dying. We want no other salvation than to live in this world. Where are there any saved through your speech? Pomaree is dead; and we are all dying with your cursed diseases. When will you give over?' (*Omoa*, p. 228)

「嘘を言え、嘘を言え、お前たちは救いを説くと言うが、見ろ、われわれは死んでしまう。われわれには、この世に生きてゆく以外に、救いなど要らないのだ。お前たちの説教を聞いて救われたものが、どこにいるか。ポマレは死んでしまった。今、われわれはおまえたちの悪病のために、死にかかっている。いったい、いつになったら止めるんだ。」

タヒチ人は前途の望みを失った。野蛮の腐敗と、文明の廃頹とが結合して、彼等の上におおいかぶさってきた今、ただ黙って滅亡の日を待つこと、これが彼等に残された唯一の道である。

The palm-tree shall grow,
The coral shall spread,

But man shall cease. (*Omoo*, p. 229)

椰子の木は育つらん、
 珊瑚礁は拡がるらん、
 されども人は滅ぶらん。

以上、*Typee* の削除、訂正、書入れ箇所と、*Omoo* で指定された数章の内容を検討した結果を約言すると、まず、両者は互いに交換が可能なほどにその内容に共通点があるということ、と「事実」は常に「批判」の出発点にすぎず、この批判は、大きく二つの傾向に分かれ、一つは、伝道活動に対する疑惑となり、もう一つは、西欧諸国の力による植民地政策に対する攻撃から、西欧文明そのものへの批判に向かう。メルヴィルは、あたかもブーガンヴィル Louis Antoine de Bougainville (1729-1811) の記録に対して、ディドロ Denis Diderot (1713-84) が示した反応と同じような、侵略された側に立って、「事実」をヨーロッパ文化の批判の武器に転化していると言えよう。白人たちが南太平洋の島々に持ち込んだ害毒や、病気の解毒剤として、宣教師を送りこんで来ようとも、彼等が犯したさまざまな悪を免罪するものではない。未開人は、ただヨーロッパ人の破壊、蹂躪の対象にしすぎないとすれば、白人との接解を経験していないタイピー族こそ、祝福された民族と言わなければならない。「片手に十字架、片手に短剣をもって」南太平洋に侵入してきた白人に対する徹底した攻撃——これが、これまでの検討箇所の主調音であった。

これまでの引用でもう既に明らかなように、メルヴィルという作家は、南海の個々の被写体を接写用のレンズを使って、至近距離からねらうと同時に、遙かに広角の望遠レンズで、雄大な構図を記録に写し撮ろうとしたカメラマンでもあった。メルヴィルの初期の作品は、一部で誤解されているように⁵⁴⁾、実験室のピーカーの中で展開された、いわゆる「現実」と微弱な係りあいしか持たない作品では決してない。彼の初期の作品には、*Typee* では1842年のマーケサス諸島、*Omoo* では同年のタヒチ島、*Redburn* では1842

年代のリヴァープール、*White Jacket* では1840年代のアメリカ海軍での生活、といったそれぞれ事実、現実の固いバック・ボーンが通っている記録文学的色彩の強いものである。記録精神とは、事実や現実を事実や現実として見ようとする体質であり、政治的なものから退避しない精神のことである。メルヴィルにとっては、南太平洋での列強の抗争、伝道活動の実体は、あまりになまなましい現実であって、フィクションの余地のない問題であつたろうし、又彼は、それを記録に留めるにあたって、当然その記録される事柄の重要性を信じていたことであろう。この記録精神の持主メルヴィルの南海における足跡を、精緻を極めて記録したアンダースンが、この稿でとりあげている内容に対して、「プロパガンダ」という烙印を押して重視しないばかりか、むしろ小説技法という視点からは、マイナスであった⁵⁵⁾、としているのは、初期のメルヴィルという極めて政治性、思想性の強い作家の一面を、あっさり見落とすことになりそうである。彼の初期の作品に対するアプローチとして、時代と環境に対する作者の鋭敏な反応を抜きにして、純粋に小説技法のみを問題とする極度の技術主義をとることは、誤りであるように思われる。父親アランのハーマンに対する「政治的論争は、敵をつくるから避けなさい」avoid Political discussion, which produces enemies⁵⁶⁾ という、かつての言葉にもかかわらず、メルヴィルの作家的欲求の一つは、明らかにこの「プロパガンダ」と呼ばれている政治的、思想的論争の箇所にあつたものと思われる。

(昭和45年5月20日受理)

註

1) Jay Leyda の *The Melville Log: A Documentary Life of Herman Melville* (New York, 1951) を見ると、その第二巻、617頁、1860年の項に疑問を残しながらも、次の記録がある。

[?] *From the poems copied by Elizabeth, Melville discards one before his departure:*

*A Reasonable Constitution

What though Reason forged your scheme?

'Twas Reason dreamed the Utopia's dream:

'Tis dream to think that Reason can
Govern the reasoning creature, man.

* Observable Sir Thomas More's "Utopia" are First its almost entire reasonableness. Second its almost entire impracticability [.] The remark applies more or less to the Utopia's prototype "Plato's Republic [.]"

- 2) 例えば, Harbinger の George Ripley の書評や, National Anti-Slavery Standard 掲載の書評などがあげられる。Hugh W. Hetherington, *Melville's Reviewers* (Chapel Hill, 1961), pp. 26, 52, 64.
- 3) 1849年5月19日付の The Morning Chronicle 紙上で *Mardi* が評された際に, 次のような章句が見える。
…the book was a wonderful and unreadable compound of Ossian and Rabelais —of More's "Utopia," and Harrington's "Oceana,"—of "Gulliver's Travels," and "Cook's Voyages,"… (*The Melville Log*, I, 304).
- 4) 日本英文学会編集『英文学研究』, 第40巻第2号, 1964, pp. 199-214.
- 5) ヨゼフ・ロゲンドルフ著, 「反ユートピア文学の勃興」(上智大学編集『ソフィア』, 第6巻第3号, 1957) p. 250.
- 6) 「ユートピアと千年王国の逆説」(学燈社編集『伝統と現代』第2巻第1号, 1969) p. 55.
- 7) 「ユートピア文学の二つのタイプ」 pp. 199-201.
- 8) メルヴィルが描きあげたヒーローたちは, 申し合わせたように, 客観的事実に対して主観的視点の優位性を主張しつつげ, やがて混乱と破滅へと失墜してゆく同一パターンを持っている。
- 9) *The Letters of Herman Melville*, ed. Marrell R. Davis and William H. Gilman (New Haven, 1960), p. 130.
- 10) 以下この稿の第一章に限って *The Melville Log* からの引用は, 文中に略記することとする。
- 11) *The Beards' New Basic History of the United States* (New York, 1960), p. 197.
- 12) メルヴィルの母マライアの性格に関しては, これまでもさまざまな異論があったが, 父アランについては, 敬虔な紳士の商人像が定着してしまって, あまり議論の対象とはならなかったと言える。事実アランの手紙には, この引用にも見られるように, "with the favour of Providence" とか "with the blessing of GOD" (*Log*, I, 4), "with the blessing of Heaven" (*Log*, I, 7), "with proper care & the blessing of Providence" (*Log*, I, 8) といった類の表現が, 殆んど無意識に口をついて出ているし, 1842年10月27日に甥の Guert Gansevoort が航海に出る際に与えた手紙にも, 次のような言葉がある。'…forget not your Creator in the dawn of youth… neglect not the Bible, regard it as your polar star…' (*Log*, I, 19) しかしこれらはほんの一例で, アランの信仰を裏書きする資料は, 彼の手紙, 日記のいたるところに散在していて, どうやら信仰篤い紳士の商人アランのイメージが出来あがるのも止むを得ないように思われる。が気になるのは William H. Gilman が考証しているように, "Only four references to church attendance appear in the scores of letters written by Maria and none whatsoever in the 250 odd written by Al-

lan.” (*Melville's Early Life and Redburn* (New York, 1951), p. 21) という事実である。これらメルヴィル家の信仰の問題、特にハーマンのキリスト教に対する姿勢は、いずれ稿を改めて取り組むべき大きなテーマであって、後日を期すべく、この稿では思い切って避けて通った。

- 13) *The Melville Log*, I, 73-77. にその要点の抜萃があるが、W. H. Gilman の *Melville's Early Life and Redburn*, pp. 253-263. がさらに詳しい。
- 14) この短篇は、*The Works of Herman Melville* (16 vols.; Standard Edition; London: Constable & Co., 1922-24, Reissued 1963 by Russell & Russell, Inc.), *Billy Budd, and Other Prose Pieces*, pp. 382-399. に全文が収録されているが、この稿の第三章で改めてとりあげてみたい。なお、本稿で使用したテキストは、特に明記しない場合は、すべてこの Russell & Russell 版であり、作品引用は、すべてこの版による。
- 15) *Herman Melville* (Los Angeles, 1951), p. 14.
- 16) 習作といえば、リヴァプールへの航海を終えた後の 1839 年 11 月 16 日に、前記 Democratic Press 紙に“Harry the Reefer”という筆名で載せられた“The Death Craft”と題する小篇が気にかかるが、Jay Leyda は、これをメルヴィルのものらしいとして *Log* の中に収録し (I, 97-98), Leon Howard は、メルヴィルのものと断定した上で、後作 *Benito Cereno* と結びつけて論じている。(*Herman Melville*, p. 29).
- 17) *Redburn* の中には、この「流転」を裏付ける言葉が散見されるが、一箇所だけ引用しておく—
 “Here, now, oh Wellingborough, thought I, learn a lesson, and never forget it. This world, my boy, is a moving world;…” (p. 200).
- 18) Melville, *Redburn*, p. 1.
- 19) *Ibid.*, p. 10.
- 20) *Ibid.*, pp. 11-12.
- 21) *Ibid.*, p. 129.
- 22) Beards, *History*, p. 209.
- 23) Melville, *Redburn*, p. 123.
- 24) *Ibid.*, p. 237.
- 25) この頃のマライアの手紙は、すべて借金の申し入れであり、生活の苦しさを訴えたもので、いつの手紙を引用しても大差はないが、Peter Gansevoort にあてた 1839 年 12 月 14 日の書簡には、次のようにある。

My son Herman is now doing well and will be able to allow me from \$150. to \$200. a year. Allan will soon be able to earn more than he needs for Clothing and will be able to assist me also, …Herman will need nearly the whole of his first quarters salary after paying his board, to procure necessary clothing & c.... You must both know that it would be impossible, to keep a Family of five Children and myself for less than fifty Dollars a month,…. (*Log*, I, 98-99).

- 26) 伯父の印象をハーマンは、次のように記している。

In 1841 [1840] I visited my now venerable kinsman in his western home, and was anew struck by the contrast between the man and his environment. (Log, I, 106).

- 27) Melville, *Moby-Dick*, p. 1.

- 28) メルヴィルの航海については、James Baird の *Ishmael* (New York, 1960) の pp. 86-89 に詳しい。

- 29) *The Melville Log*, I, 167-168. なお、Leon Howard は前掲書で、二十四歳の誕生日をそこで迎えたホノルル時代に、ハーマンの知的転機を見出そうとしているが、いかにせん資料不足のため説得力のないものに終わっている。

- 30) メルヴィルを南太平洋に駆りたてた理由として、勿論の他にもさまざまな付帯的理由はあったものと思われる。大ていの評家の認めるごとく、Dana の *Two Years before the Mast* (1840) を読んだことが何らかのきっかけを与えることになったかも知れないし、ガレナで Cooper の *Red Rover* を読み、当時太平洋に捕鯨船で出ている従兄 Thomas の噂話を聞き、Captain Marryat に影響を受けたことも理由の一つではあろう。さらに、海に対する彼の関心の根柢として、幾度となく大西洋を渡ったアランが植えつけたであろう期待をあげ、さらにメルヴィル家の血を引きあいに出すことも出来よう。しかし、付随的理由をおそらく避けがたい偏見をまじえながらいくらつけ加えても構わないが、基本的理由は当時の不況であり、家庭の経済的理由である。ダイナがあつさり航海に出た時の心情とハーマンのそれとは、まったく別のものであって、後者の心境は、S. Foster Damon が “Why Ishmael Went to Sea” (*American Literature*, II. (1930), 281-283.) で Ishmael の言葉を借りて要約した “every man’s hand against him” につくされている。

- 31) この間の事情を Newton Arvin は *Herman Melville* (New York, 1961), p. 77 で次のようにまとめている。

The germ of what was creative in him needed to ripen, not in solitude or in intellectual labor, but in the push and stir of action. In the beginning, for Melville, was decidedly not the word, but the deed.

- 32) Melville, *Pierre*, p. 425.

- 33) William Charvat, “Melville’s Income”, *American Literature*, XV. (1943), 251-261.

- 34) Davis and Gilman, *The Letters*, pp. 91-92.

- 35) *Ibid.*, p. 128.

- 36) *Typee* の売れゆきは、アランのメモによれば、1849年1月1日までに合衆国で6,392部、51年4月29日までに英国で7,437部となっており (Raymond M. Weaver, *Herman Melville, Mariner & Mystic* (New York, 1961), p. 253.), 1846年にはドイツ語訳が、翌年にはオランダ語訳が出されている。又、次のホーソンに宛てた私信は、この名声、人気ということを *Moby-Dick* (1851) 出版当時彼がどう考えていたかという点で、興味がある。

To go down to posterity is bad enough, any way; but to go down as a

“man who lived among the cannibals”!...I have come to regard this matter of Fame as the most transparent of all vanities... I did not think of Fame, a year ago, as I do now. (*The Letters*, p. 130).

- 37) Davis and Gilman, *The Letters*, p. 39.
- 38) *Saturday Review of Literature* (Nov. 24, 1928), p. 406 で Bernard de Vovo は、Harvard College Library にある *Typee* のアメリカ初版二部を校合した結果、M. Minnigerode の説とは違って、改訂アメリカ版が出る前に、次第に削除箇所を増やしながら初版が二刷、三刷と印刷されていた事実をつきとめている。
- 39) Evert A. Duyckink に宛てた 1846 年 7 月 28 日の手紙には、次のような文章がある。
 The Revised (Expurgated?—Odious word!) Edition of *Typee* ought to be duly announced—& as the matter (in one respect) is a little delicate, I am happy that the literary tact of Mr Dycknck [*sic*] will be exerted on the occasion. (*The Letters*, p. 43) 作家メルヴィル誕生の産婆役をつとめたダイキンク、マレーは、生まれたばかりの子供に対しては、生殺与奪の権利を握った裁判官でもあったわけで、マレーのメルヴィルに対する助言は、既に原稿の段階ではじまっている。
 I have carefully examined the MS. placed by you in my hands entitled “*Typee*” and am willing to publish it—making a few slight omissions—which on the score of taste I have no hesitation in saying will be for the benefit of both author and book,... (Merrell H. Davis, *Melville's Mardi, A Chartless Voyage* (New Haven, 1967), p. 12).
- 40) Davis and Gilman, *The Letters*, p. 48.
- 41) 第三作 *Mardi* 以降のメルヴィルの作品の英国における出版を引き受けた Richard Bentley にあてた 1849 年 6 月 5 日の手紙には、次のような言葉がある。
 But some of us scribbers, My Dear Sir, always have a certain something unmanageable in us, that bids us do this or that, and be done it must—hit or miss. (*The Letters*, p. 86).
- 42) このテキスト選定には、さまざまな疑問点がある。第一に、このテキストは明らかに substantive text ではなく、しかも発行年も不明である。さらに、内容の上でもあるべき Preface が落ちているし、Preface to the Revised Edition も入っていない。反面、削除されている筈の APPENDIX が、“The Story of Toby” の後に付いたり、本文中にも数カ所疑問に思われる箇所があって、比較校合のためのテキストとしては、極めて不完全なものである。しかし、勿論言いわけにはならないが、*Typee* の bibliography の分野はいまだ数多くの問題を抱えたまま開拓が遅れているようで、1922 年に Mead Minnigerode がこの分野に踏みこみ、28 年に Bernard de Voto が疑問を提して以来、はなばなしい展開は見られない。61 年に出た Hugh W. Hetherington の *Melville's Reviewers* でさえ “The bibliography of the second edition is complex, and only the main aspects are given here.” (p. 54) と逃げている有様で、この問題については他日を期したい。
- 43) 「文明」と「野蛮」のテーマは、後作にも度々顔を出す、思いつくまま引用すると—*Isreal Potter* で、アメリカのリチャード号とイギリスのセラピス号との間で行な

われた激戦の後で、次のように書いているし、

The loss of life in the two ships was about equal; one-half of the total number of those engaged being either killed or wounded. In view of this battle one may ask—What separates the enlightened man from the savage? Is civilization a thing distinct, or is it an advanced stage of barbarism? (p. 173).

Redburn にも次のような箇所がある。

We talk of the Turks, and abhor the cannibals; but may not some of *them* go to heaven before some of *us*? We may have civilised bodies and yet barbarous souls. We are blind to the real sights of this world; deaf to its voice; and dead to its death. (p. 379).

- 44) Dodd, Mead 版では、“but, nevertheless, removed” とある。なお、ここにあってあげなかったが、120. 3 の “Somewhat” も “I felt somewhat” と書き替えられている。
- 45) Melville, *Typee* (The Northwestern-Newberry Edition), p. 361.
- 46) 大衆文学の宿命でもあろうが、他人を、読者を意識するあまり、作者がわが道を行くことを放棄した瞬間に、当初の強烈な衝動と個性は姿を消して、作者は作品の外にはじき出される結果となってしまう。読者に対する恨をメルヴィルは、次のように書いている。

What a madness & anguish it is, that an author can never—under no conceivable circumstances—be at all frank with his readers.—Could I, for one, be frank with them—how would they cease their railing—those at least who have railed. (*The Letters*, p. 96).

- 47) キリスト教と、その文明を携えて白人が南太平洋の島々に侵入して以来、各島の人口が急激に減少の一途をたどった、とする主張は *Typee* でも *Omoo* でも繰り返されるが、Alan Moorhead も *The Fatal Impact, An Account of the Invasion of the South Pacific 1767-1840* (New York, 1966), p. 96 で、“the French have coaxed back the population to just about the figure it was in Cook’s time—roughly 40,000—” と記して、この事実を暗に認めている。又、Henry C. Morris は *History of Colonization* (New York, 1900) の中で、“Statesman’s Year Book (1900)” からの数字として、タヒチの人口を12,755としている (p. 456) が、Stephen H. Roberts は *The History of French Colonial Policy 1870-1925* (London, 1963) で、次のような数字を示している。

From 20,000 in 1848 they [Marquesans] have dwindled to almost a thousand to-day [1929], and not a sound phsical specimen survives. The vitality seems to have gone from the race, and, lacking the will to live, they wither and give way… Adaptation to changing circumstances now seems beyond their power, and, in all af French Oceania, only one group, …, has an increasing population. (pp. 514-515).

- 48) メルヴィルがキリスト教をどう受けとめていたか、という問題とは別に、作品中に見

られる一見して反キリスト教的と思われる描写や、発言に対して、現地諸島で実情を目のあたりにしたであろう Captain Esek Hawkins, Jr. は1849年12月10日に書いた手紙の中で、次のように評している。

“All that Melville ever told about the missionaries in this part of the world, you may take for gospel.” (William H. Gilman, “A Note on Herman Melville in Honolulu”, *American Literature*, XIX. (1947), 169).

さらにこの手紙は、ホノルル時代のメルヴィルを知っていた男の話として、メルヴィルがボーリング場のピン係として働いていたことがある、“…knew him at a time when he was setting up pins in a ball alley”と伝えており、Gilmanは *Melville's Early Life and Redburn* で、これを採録しているが、真偽のほどは分らない。

- 49) Charles R. Anderson, *Melville in the South Sea* (New York, 1951), p. 335.
50) *Ibid.*, pp. 333-337.

このあたりからアメリカの商人、ミショナリ、あるいはその息子たちが王家の関係を支配しはじめ、いわゆる「王作り」Kingmakerの役割を演じ、政治、経済の実権が、彼等の手中におさめられてゆく。この中でも特にミショナリの性格に注目して、蕨内芳彦はその著『ポリネシア』(大明堂, 1967)で次のように述べている。

「今日ハワイの砂糖産業は五つの大会社(1) Brewer & Co., Ltd., 2) Casle & Cooke, Ltd., 3) Alexander and Baldwin, Ltd., 4) American Factors, Ltd., 5) Theo. H. Davis & Co., Ltd.)によって支配されているが、…とくに注目すべき点は、その創設者は三つまでミショナリと直接間接に結びついているということである。上述のタヒチの場合と同じく、ミショナリの性格の半面をうかがうことができる。つまり1)と3)の会社はミショナリの息子の創設であり、2)はミショナリ自身によって起こされた会社である。」(p. 189).

- 51) John Bernstein も *Pacifism and Rebellion in the Writings of Herman Melville* (London, 1964)で次のように強調している。

(It should be here strongly emphasized that Melville's attack upon the missionaries in *Omoo* is in no ways to be construed as an attack upon Christianity itself, though in his later works, he finds himself at odds with the philosophical basis of the religion.) (p. 28).

- 52) その中には、Right Rev. M. Russell の *Polynesia: or an Historical Account of the Principal Islands of the South Sea*, Otto Von Kotzebue の *A New Voyage Round the World in the Years 1823-24-25-26.*, Turnbull の *Voyage Round the World, in the Years 1800-1804*, F. W. Beechey の *Narrative of a Voyage to the Pacific and Beering's Strait under the Command of Captain F. W. Beechey R. N.*, Daniel Wheeler の *Memoirs of the Life and Gospel Labours of the Late Daniel Wheeler, a Minister of the Society of Friends*, Captain Wilson の *A Missionary Voyage to the South Pacific Ocean*, Vancouver の *Vancouver's Voyages* などが次々とあげられ、発行地、発行年、頁数まで明示されるが、後年 *Moby-Dick* の“Extracts”にも見られるこのメルヴィルの原典愛好癖、記録好きは、Newton Arvin も “A love of information for its own sake was one of the

aspects of Melville's complex mind." (*Herman Melville*, p. 80) と認めている。メルヴィルの場合、文献を大切に、事実を重んずる態度が、脱線、饒舌癖と結びついて、物語の筋の展開とは直接かかわりあいのない雑談、論争の章を生み出す結果となっているが、彼の作品は、終生物語を選ぶ章とおしゃべりの章とを、ただ並列的に並べるといふ素朴な形式をとっているので、これが却って改稿にあたっては、ある部分を切除するという安易な外科的取扱いのみで、事が足りたとも考えられる。

- 53) この間の事情を Alan Moorhead は、次のように書いている。

In that soft soporific climate it was impossible to make the people work for long. They would try hard but things always went wrong in the end. The missionaries imported a weaving machine, and for a month or two the girls worked it with great enthusiasm. Then the novelty wore off and the machine was left to rust away in its palm-leaf hut. It was the same with the attempts to start cotton and sugar-cane growing; after the first season or two the workers drifted away. (*The Fatal Impact*, p. 87).

- 54) 例えばジャック・フェルナン・カーンは、その『アメリカ文学史』(島田謹二訳、白水社、1952) p. 41 で、次のように解釈している。

「典型的なアメリカの小説家は、或いは理想化された描写をするか、或いは現代に近くなるにつれ、わが周囲の社会を批評するか、そのどちらかである。ところがホーソンとメルヴィルとは、はっきり社会に背をむけてしまう。……ハーマン・メルヴィルは、太洋に、その島々に、その怪物に、にげてゆく。」

- 55) Anderson, *Melville in the South Seas*, p. 309.
 56) Gilman, *Melville's Early Life and Redburn*, p. 16.